

平成 25 年度中間支援組織による地域環境
保全活動支援の在り方検討業務

実施報告書

平成 26 年 3 月

株式会社ダブリュファイブ

目次

I	事業概要	1
II	地域づくり支援の在り方検討	
1	概要	2-3
2	取組事例紹介	4-13
3	中間支援組織等関係者紹介	14-18
4	意見交換会	19-21
5	まとめ	22-26
III	環境 ESD プログラムの普及取組の在り方検討	
1	概要	27-28
2	環境プログラム関係者の取組内容紹介	29-48
3	意見交換会（グループワーク、参加者の感想）	49-66
4	まとめ	67-71

I 事業概要

1 業務の目的

中部地方環境事務所（以下「環境事務所」という）は、中部地方環境パートナーシップオフィス（以下「EPO 中部」という）を設置するなど、地域の団体等の環境保全のための取組促進に努めており、EPO 中部においては、広域の中間支援として、協働による地域の環境保全活動促進等のために中部地域（富山、石川、福井、長野、岐阜、愛知及び三重の各県を云う。以下同じ）の協働取組等の支援、地域の中間支援組織との連携によるネットワークづくり等を行っている。

このため、中部地域の環境保全のための取組促進に資するため、中部地域における中間支援組織による環境保全活動支援の在り方を検討する。

2 業務の内容

意見交換会により、中間支援組織による地域づくり支援及び環境 ESD プログラムの普及取組の在り方を検討する。

3 検討する内容

（1）地域づくり支援の在り方

地域づくりの活動には何が必要で、中間支援組織として何が支援できるかを探る。

（2）環境 ESD プログラムの普及取組の在り方

環境省人材育成事業 ESD 環境教育モデルプログラム等環境 ESD プログラムが地域で広く取り組まれるための方策を探る。

4 検討方法

EPO 中部と連携し、中間支援組織等関係者に助言、提言等協力をいただき、意見交換会の開催等により検討する。

Ⅱ 地域づくり支援の在り方検討

1 概要

(1) 事前検討会

ア 日時、場所

平成 26 年 2 月 7 日 中部地方環境事務所第 2 会議室

イ 参加者

木村 真樹 氏 一般財団法人あいちコミュニティ財団 代表理事
コミュニティ・ユース・バンク momo 代表理事
戸崎 泰史 氏 日本政策金融公庫名古屋中支店 融資第四課長
村田 元夫 氏 株式会社ピー・エス・サポート 代表取締役
新海 洋子 氏 中部地方環境パートナーシップオフィス
前田 陽介 氏 中部地方環境パートナーシップオフィス
片岡 和則 氏 中部地方環境事務所環境対策課

ウ 内容等

検討の範囲、内容、(2) の意見交換会の進め方等の協議・確認を行う。

(2) 意見交換会の開催

ア 日時、場所

平成 26 年 2 月 21 日 (金)

桜華会館 名古屋市中区三の丸一丁目 7 番 2 号

イ 参加者

19 名

ウ 内容等

◇ 取組事例紹介

- ・木質バイオマスのエネルギー利用による山村再生「木の駅」
森 大顕 氏 特定非営利活動法人地域再生機構 理事
- ・愛知でのエコビレッジづくり
佐野 和博 氏 いるかビレッジ 代表
- ・薪の宅配サービス ―地域の資源と人材を活用―
木平 英一 氏 株式会社ディーエルディーバイオエネルギー事業部部長
- ・循環の地酒「めぐる」の取組
松野正太郎 氏 リユースプロジェクト「めぐる」リーダー
名古屋大学大学院環境学研究科 特任助教

◇ 中間支援関係者の紹介

- ・木村 真樹 氏 一般財団法人あいちコミュニティ財団 代表理事
コミュニティ・ユース・バンク momo 代表理事
- ・戸崎 泰史 氏 日本政策金融公庫名古屋中支店 融資第四課長
- ・西井 勢津子 氏 株式会社 地域資源バンク NIU 代表取締役
- ・村田 元夫 氏 株式会社ピー・エス・サポート 代表取締役

◇ ワークショップ

ダイアログ 「地域の抱える課題の解決について考える」

ファシリテーター 新海 洋子 氏

中部環境パートナーシップオフィス チーフ
プロデューサー

(3) 取りまとめ

ア 日時、場所

平成 26 年 3 月 10 日 (月) 中部地方環境事務所第 2 会議室

イ 参加者

- 木村 真樹 氏 一般財団法人あいちコミュニティ財団 代表理事
コミュニティ・ユース・バンク momo 代表理事
- 戸崎 泰史 氏 日本政策金融公庫名古屋中支店 融資第四課長
- 西井 勢津子 氏 株式会社 地域資源バンク NIU 代表取締役
- 村田 元夫 氏 株式会社ピー・エス・サポート 代表取締役
- 新海 洋子 氏 中部地方環境パートナーシップオフィス
- 前田 陽介 氏 中部地方環境パートナーシップオフィス
- 片岡 和則 氏 中部地方環境事務所環境対策課
- 赤塚 康司 氏 中部地方環境事務所環境対策課

ウ 内容等

意見交換会を踏まえ、次について中間支援組織等関係者と検討・協議の上、取りまとめる。

(ア) 地域づくりの活動に望ましい環境、必要な取組

(イ) 中間支援組織の支援として考えられる事項

2 取組事例紹介

<報告テーマ>

木質バイオマスのエネルギー利用による山村再生「木の駅」

<報告者>

森 大顕 氏 特定非営利活動法人地域再生機構 理事

<報告内容>

『木質バイオマスエネルギーによる山村再生 木の駅』ということで説明させていただきます。

私たちが地域再生機構という団体そのものなのですが、私が最も関わっている大垣市の上石津町では、だんだんと人口が少なくなっております。問題は、昔は山の木を切って、地域の家々に使用したり、かまどに木をくべて、その灰をまた産業、農業に使い、資源が循環していた。それが今は便利な石油等が外から入ってくることによって、お金が外に流れてしまい、同様に人も外に流れてしまっていて、若い人たちが地域からいなくなっているのではないかと思います。

このような地域は、人口が減少し続け、地域自体が存在していないような状況になっており、これを何とかできないかということで、もう一度かつての地域のように地域の資源が循環し、地域の中で経済がまわるようなものを作ることができないかと考えております。

そのきっかけが「木の駅」という仕組みで、軽トラックに積んで持って行くと、約 2000～3000 円程度の地域で使えるというお金として地域通貨で支払う仕組みをしております。

具体的にどのような仕組みなのかと言いますと、もう一度循環を取り戻そうということや、人口減少に伴い店舗数も減少しているため、地域にお金を循環させようという仕組みです。

伐採して山から様々な木を持ってきて検尺します。長さを測ったり、高さを測り体積を記入し、それを出荷します。

そこで森券という券と伝票を発行すると、森券で支払われます。それを商店で人々が利用して、事務局がお金と森券を交換するという仕組みです。

3000 円でしか売れないものをなぜか 6000 円で買い付けるという特殊な仕組み、それでも成立しているという、変わった仕組みとなっております。

大部分は、補助金に頼っているという点がありますが、補助金が無くなればこの取り組みをやめるのは、悲しいよねと、言って頂く声があり、薪にすると

もう少し高い値段で買うことができます。

そこで、薪をエネルギーとして、地域にもう一度使うことができるようにしていこうという取り組みを始めましたが、その地域の人が本当にやりたいと思えないと、この仕組みは立ち上がりません。

今年度は環境省の予算を使い、実証事業を行っておりますが、大垣市の上石津町で、薪ボイラー入れて、地域の温泉スタンドを活用したい、温泉を作りたいと考えています。温泉が出来上がった際に、木の駅を作り、木の駅から薪を供給して、薪ボイラーを燃やそうという計画になっていますが、大垣市がなかなか温泉施設を作ってくれないそうです。

そこで、自分たちで作ろうということで、コミュニケーションセンターの裏に温泉を作りました。

薪は地域の方が木の駅で集めたものを斧で割ったほうが速く、1日でかなりの量を作ります。

そして良い薪ボイラーを買おうと、オーストリアから買ってきました。誰でも使える、洗練されている点が利点です。

地域の方は活動に積極的ですが、儲けようとする人は、ほとんどいません。ある雑誌に取り上げられた際にも、皆で和気あいあいと、儲けたお金でお酒を一杯呑んだり、缶コーヒーを飲めることが一番良いという考えの元、取り組んでいます。

課題としては、薪が売れないと収入が入らないことです。

薪は大量に作っていますが、なかなか売れないために、売れるにはどうしたら良いかと悩んでおります。

また、ボイラーと言っても様々なものがありますが、値段が結構高いものが多いです。もう少し導入しやすくするような仕組みが必要であると考えているところです。

<報告テーマ>

愛知でのエコビレッジづくり

<報告者>

佐野 和博 氏 いるかビレッジ 代表

<報告内容>

地方都市の街中で里山の暮らしを実験している。実験は、遊びに通じます。気楽な気持ちで活動している感じです。近くの山林の木材を使って地産地消で、出来る限り木造の在来工法を使った低層のコミュニティースペースを作っています。

何もないところから、最初はフィールド作りから始めました。パーマカルチャーガーデンといって、循環型の場作りの一つの手法になりますが、多様な人々と一緒に、一から始めました。

今現在は、まわりの地域の子供や親御さんを交えて田畑仕事などの活動をしています。住宅街の中で、ここだけ田畑仕事等をしていますので、異空間となっています。

いるかビレッジと言う名前の街中エコビレッジ、持続可能なコミュニティの場が、形成されつつありますが、今日は、私の中での課題を考えてきました。今、時代の転換期であると言われるますが、様々なことが今までのシステムのままでは、前に進めない状況が多いと感じます。私は、このコミュニティの場を使って解決ではなく、解消というキーワードで取り組んでおります。

私たちの考える解消の広がりや意味というのは、問題が起こる前に、その問題の元になる部分を予防して先回りして行ったらどうなるか、消していくためにどうしたらいいのかということです。

これは解決ではないか？と言われるかもしれませんが、解消という気持ちで取り組んでおります。

その一例として、子供たちは、幼児期に足の裏をどろんこ遊びで得られる多様な感覚を土に触れることにより獲得したり、本来は幼児期のうちにしなければならぬ体験も、街中で里山での遊びと同じような感覚で親子共々、問題を解消するということです。

もう一つエコビレッジの入り口として、「いるカフェ」という名前で、コミュニティカフェをやっています。

カフェは、親子が一緒に来て何の気兼ねもなく一緒に遊べる場という形で、やはり子供とママが一緒になって、食事を楽しみながら遊んだり、ママ自身がひきこもっているような子育て生活から、こういうオープンなスペースでママ友

とおしゃべりしたりして、皆さんこぞって、いるカフェに来て頂いて、情報交換をしています。

また、いるかビレッジは、多種多様な外国の方もいらっしやいまして、日本の伝統的な技法である木の皮むきなどを地域の人と一緒に教えてもらいながら外国人の子供たちも学んでいます。

そして、もう1点は、このビレッジの中にもありますが、お年寄りに生活をもう一度再デザイン化してもらおう、第二の人生を違った環境で、また活き活きとした居場所をお年寄りに持ってもらおうということで、デイサービスという手法をとっています。

その中でお年寄りが子供と一緒に遊んだり、一緒に何か物を作ったり、一緒にごはんを食べたり、そのような場をつくっています。また、看護師や介護士である多くの女性は一度出産によって、職場や社会から一度切り離される機会があると思います。

今では、そこに勤めている職員さんは、一緒に子供と出勤して、子育てしながら仕事もしていくという形で、女性の方々と一緒になって、お年寄りの立つ瀬、子供の保育を一緒にやっています。つまり、様々なものを混ぜ合わせた状態にしています。これによって、暮らしの問題、社会の問題、そういうものを解消できるのではないかと考えております。

はじめは、街中に里山の風景があり、何なんだこれは？ということで、皆が外から興味を持ち始めました。そこから次のステップとして、施設という形で、ママカフェや介護施設、外国人就労の場、または主婦ニートの就労支援、または保育教育などをコンテンツ化している状況です。

皆興味を持って集まってきますが、次にその集まってきた、ママ、お年寄り、子供たちが自主的に様々な企画を練り始めていて、コミュニティ形成の第二段階にきています。

単純なユーザーから皆が提供者に変わってきているのが現状です。ママたちが自主的に食についての勉強会をしたり、先日はモンゴルの遊牧民の暮らしや音楽を、ある主婦の方が企画し、みんなが面白そうだということで、開催されました。

そこで、コミュニティが形成される背景には何があるのかと、考えてみましたが、

一つのキーワードとして利他性というものがあります。

里山の暮らしは、まさに自然の恵みを頂いたり、皆さんからありがとうございます

ますという形で、我をつくるのではなく、場の中から様々なものを頂き、その意識の集合体が一つのコミュニティーという形で利他性の中に全てが出来上がってきているのではないかと感じております。

そこから、自らの楽しみ、楽しいことを融合させることによって還元できる仕組みを感じられる場、それが街中で里山の暮らしを体験しながらコミュニティーを形成してゆく街中エコビレッジという要素です。

課題は、ビジネスと繋がっていかなければならないということです。ビジネスの部分と里山の文化がどう融合していくか。ビジネスに繋げていくことがどういう段階で、どういうかたちで、やっていけるか。ということです。いるかビレッジの方針として、アクションセンター、イノベーションセンターの併設を検討していますが、この中で二次的なリーダー、次世代のリーダーの育て方が、最重要課題と感じています。

<報告テーマ>

薪の宅配サービス ―地域の資源と人材を活用

<報告者>

木平 英一 氏 株式会社ディーエルディーバイオエネルギー事業部部長

<報告内容>

長野県、山梨県での取り組みですが、薪の話をして頂きたいと思います。最初に薪の前に、薪ストーブの話をしてと思います。薪の利用は今、進んでいます。今中心になっているのは家庭用の薪ストーブです。薪ストーブというと、わりと簡易なものを想像される方も多いですが、今普及し始めているのは、しっかりしたストーブです。部屋の真ん中に土台を置いて、ストーブを設置するというような形です。これ一台で 40 坪程度の家でしたら、薪ストーブのみで全館暖房が可能です。

煙突が伸びていて、外からみると煙突が立っているという形です。薪ストーブの価格は本体、煙突、設置費用、全部込みでおよそ 100 万円になり、安いものではありません。どのような時に皆さんストーブを買うかというと、住宅の新築時に導入するケースが多いです。新しく家を建てる時に薪ストーブを入れようというのが、8 割程度となっております。

残りは家をリフォームした際などに薪ストーブを導入する傾向にあります。当社があります長野県伊那市近郊では、新築住宅の約 20%が薪ストーブを導入しています。つまり 5 軒家が建てば、1 軒は薪ストーブが導入されています。普及がかなり進んでいる状況です。

薪ストーブに関しては、明確な統計がありません。長野県がアンケート調査を行った結果、薪ストーブを使っていた人は全体の 4.1%です。意外と多いことが分かります。

長野県の世帯数を考えると約 3 万台以上、もっと簡易なのを入れると恐らく倍程度は導入されていると推定しています。このような木質燃料の場合、鹿の糞のようなペレットをよく使いますが、ペレットストーブは長野県で、およそ 2000 台くらいです。

ですから木質燃料の普及は進んでいますが、一体何が進んでいるのか。それは、実は薪で、薪ストーブということです。薪というと遅れた燃料というイメージがあるかもしれませんが、実は今、進んでいるのは薪ということです。

次に、薪の話をして頂きたいと思います。

1 軒あたりの薪の使用量が、薪の体積で 9 立米、元の本の体積でいうと 6 立米です。およそ木 10 本くらいです。ですから結構な使用量になり、樹種は広葉樹が

8割程度、針葉樹が2割程度で、圧倒的に広葉樹が好まれています。

では、その薪はどうしたかという、全部買ったという人が21%で、年間約8万円、一部購入3万5千円、購入なしが54%です。

購入なしとは、自分で薪を作ったということです。

したがって、買う人もいますが、常識的には薪は買わずに、自分でつくるものというのが現状です。

伝統的に薪は俗にナラといわれるコナラ、ミズナラ、クヌギ、そういうものが伝統的に使われていました。

よって、薪としては非常にこのナラの薪は人気があります。

ところが、私が会社に入ったときにその薪ストーブユーザーから、薪がないという声をよく耳にしました。どういうことかというナラの薪が手に入らない、そういう意味でした。

ところが一步山見てやると、間伐材が山にごろごろしているにも関わらず、上手く活用できておらず、針葉樹の間伐材を薪として何度も使おうではないか、それが実現すればユーザーも山にもメリットがあるという考えで始めました。薪の宅配サービスというのは、針葉樹の薪を流通させようという取り組みでもあり、山のために木材の有効利用をしようと、特に間伐材を使っていこうではないかという視点と、資源エネルギーの普及という、二つの視点があります。薪は、森林組合等から購入し、切って、割って、乾燥して、配達、そして代金を請求するという流れになります。

チェーンソーで切って、薪割り機で割って、手で積んで、半年間乾燥させ、専用の薪ラックに10日分の薪を納入します。

お客様が一週間を目途に減ってきたと感じた頃に、軽トラックで補充に伺います。これを冬中繰り返すのが薪の宅配サービスです。

配達の際に不在であっても納品をして、納品書を置いておきます。お客様は納品書を確認した上で、請求書を発行して、口座振替で自動引き落としします。2007年7年から始めて、最初40軒程度のお客様でしたが、現在は1100軒を超えています。長野県全県、山梨県全県、仙台市周辺で、サービスエリアも広がっています。今年の販売量は約20万束で、サービスエリアを拡大しながら、販売量を徐々に伸ばしています。

薪は、一カ所で大量生産する方式ではありません。可能な限り様々な場所で生産するため、毎年、新しい場所に薪置き場を作っています。そうすることにより、近くの原木がここに集まり、薪になり、近くのお客様に配られる。このように薪置き場の数を増やしていく事によって、地産地消の仕組みを作ることを目指しています。実はこれが最も効率が良いのではないかと考えています。

ビジネスとして展開していますが、地域の波及効果が結構大きいであろうと考えています。つまりエネルギーを地産地消するということは地域の資源と労働力がお金になるということです。それが地域に還元するという意味であると思います。

山から木を切り出してくる仕事、薪を作る仕事、それから薪を配達する仕事、全て地域の仕事になります。

そして、もう一つが、福祉施設です。障害を持った方の施設で、今 5 カ所で薪の生産を行って頂いています。薪作りは、障害の程度に応じてみんなが参加できる仕事であると思います。そういう意味で、関わったことはないが、割と取り組みやすいということで、5 カ所で生産して頂いています。

薪の宅配サービスは、資源エネルギーの普及であると同時に地域の資源を金に換え、さらに地域や施設の雇用に繋がるようなプラス α があり、公共性があるのではないかと考えています。

課題としては、ビジネスとして展開している薪の宅配サービスではあるが、採算性が結構厳しいものがあります。

値段上げをすれば、採算性は合ってきますが、エネルギーですから、皆が使うことができる価格であることも重要であり、現実的には難しいです。

一方、公共性があり、地域に貢献する事業であるとも思っています。但し、事業自体がディーエルディーという会社であり、その意味でなかなか公共性を評価されることがないように思います。会社が行なっているため儲かっていると思われがちだが、楽な仕事ではありません。

会社の事業であっても公共性を評価して、支援する仕組みがあって良いのではないかというのが私の提議です。

<報告テーマ>

循環の地酒「めぐる」の取組

<報告者>

松野正太郎 氏 リユースプロジェクト「めぐる」リーダー
名古屋大学大学院環境学研究科 特任助教

<報告内容>

リユースプロジェクト「めぐる」とは何かということですが、会社でもなく、NPO でもありません。

名古屋市が 2008 年に一般廃棄物処理基本計画というものを作りました。市民参加で我々も入り、計画を作りました。計画のみでなく、実際に行動しないと意味がないということで、いくつか重点的なプロジェクトが立ち上がりました。

そのうちの一つがリユース瓶でした。市民 NPO、瓶屋、酒蔵、行政等々、あらゆる主体が入り、約 10 数人のメンバーで活動しております。

なぜ、そもそもリユースなのか、リサイクルではなく、リユースなのか。

リユースが減少している要因は様々存在するということが考えられます。

例えば「社会・経済的要因」があります。

それは流通の問題であつたり、リカー屋が無くなったということが問題点です。

そして、そもそも瓶に入っているお酒は現在もありますが、みりんや醤油は、ほとんどありません。アイテムが無い、出し方がよくわからない等の問題もあります。

制度的には、容器包装リサイクル法という法律が、実は皮肉な事にこのリユースと言う仕組みを潰してしまったのではないかな等、様々あると思います。

販売する側としては、瓶は重くて割れやすい、ペットボトルは軽くて割れない。この点を考えると、リスクが高くなります。

消費者も昔は、あつたな。でも今はよく知らないし、売っていないよね、とかあるいはどこに返していいのか分からない等、複層的な要因によりリユースは絶滅危惧種になっていると思います。

それを解決するために、我々は活動しています。

我々は、お酒ではなく、リユースの瓶を何とかしたい。という思いで活動を始めましたが、瓶のみでは説得力に欠けるため中身も生産しようと試みました。酒蔵は、愛西市の水谷酒造で生産を始め、今期で 4 作目になり、第 4 号の「めぐる」を展開をしているところです。

晩酌で酒を飲み、出た生ゴミを堆肥にします。堆肥をヤトギという場所の水田に持っていき米を生産します。この米で、お酒を造り、リユース瓶に詰め、販売し、再び返ってくるという、いわゆる地産地消の仕組みです。これで「めぐる」という名前にしています。

それにより、日常で毎日飲めるようなお酒ということで、一本 1200 円程で販売しています。

しかし、リユース瓶ですので返って来ないと意味がありません。

一般の回収では割られてしまうため、返ってくる仕組みにしようと試みたわけですが、

市中に出てしまうとなかなか返ってきません。これが一つの課題です。

めぐるは、ワンシーズンで 1600 本を生産します。1600 本生産して、全て販売することができれば良いのですが、やはりそうはいきません。

時期的に温暖になると、火を入れて保存が利くように加工をします。

一般酒として年中売れる形をとっています。そうすると、工数が増え、コストが余計にかかります。そして、回収率の問題ですが、どのようにして飲んだものを回収するかという問題があります。

売り上げの問題、回収率の問題ということが課題となります。

そこで、例えば飲食店で飲んで頂くと、必ず瓶は返ってきます。業者が配達して、それを回収してくるため絶対に回収率は高くなります。

そのような販路を考えてみることも必要であると考えています。

吟醸酒のような高いお酒でなく、特別なお酒ではないため、めぐるというコンセプトのお酒ですから、仕組みを理解して頂く、そこを売りたい訳です。

お酒と一緒にコンセプトを売りたいという事が目的であります。

リユースはツールであり、ツールとして地域の問題、環境問題、地域経済、社会の雇用等に活かしていくことができないかと考えております。

持続可能な社会というのは、環境と経済と社会の統合と言われますが、その真ん中のツールとしてこのリユースというものを活用することができないかと考えております。

3 中間支援組織等関係者紹介

戸崎 泰史 氏 日本政策金融公庫名古屋中支店 融資第四課長

日本政策金融公庫は政府系の金融機関になります。
100%政府出資の機関であり、政府系の金融機関がいくつかありましたが、小泉内閣の頃に統合されたのが日本政策金融公庫になります。

私自身はもともと国民生活金融公庫というところにおりました。主に、小規模企業の事業者の事業資金や国の教育ローンなどを主に取り扱う機関になり国内では、沖縄を除き全国に 152 支店あります。

私の所属する国民生活事業の融資残高は 7 兆 2082 億、年間 2 兆 5 千億円超の融資をしています。

既に事業を始められている方からこれから会社を始めるという創業者への融資にも積極的に取組んでおり、平均すると年間 2 万社程度、雇用効果でいうと 8 万人弱の雇用創出効果を捻出しております。

逆にいうと、事業を全く始めてない方への融資に関しては、金融機関の中でも、数多く融資に取り組んでいる金融機関になります。

NPO 法人に関する融資に付きましては NPO 法人の形態が出来上がった頃から、取り組んでいます。現在は、年間で全国 600 件から 700 件程、愛知では 20～30 件程度、融資に取り組んでいます。

ソーシャルビジネスの分野に関しては、国の関心が非常に高まっている状況です。

実は、ソーシャルビジネスを展開される方向けの融資制度が補正予算に基づいて、先日リリースされました。ソーシャルビジネスに関する新しい融資制度も確立しつつある中で、その分野に関して、今後可能な限り積極的に対応をしていきたいと考えています。

先ほど木村さんのお話の中で、地域金融機関との連携ということが取り上げられていました。

地域の金融機関がなかなか融資に取り組むことができない理由の一つとしては、信用保証協会のような保証してくれるところの制度がないという点でなかなか取り組みづらいのではないのでしょうか。

事業を支えていく必要があるという観点で言うところでいくと、創業前、創業後のスタートアップに積極的に取組みつつ基盤を確立するタイミングについては、地域の金融機関の皆様とも連携することができればと考えております。

西井 勢津子 氏 株式会社 地域資源バンク NIU 代表取締役

六年間ほど名古屋に暮らし、名古屋の NPO 畑を歩いてきましたが、恩を田舎に返しますということで、三重県の小さな村に移住をして起業しました。

その会社名が地域資源バンク NIU と言います。

私は、田舎に移ってカントリーショックというものを受けてました。

それは、分別が全く無いということです。名古屋ではゴミの分別が大変細かいですが、田舎では、全てが燃やすゴミです。悪く言えば、田舎はいい加減なところがあります。ゴミの分別の違いは、コミュニティの違いにも共通していて、久しぶりにこちらに出向いて、コミュニティが細分化されていること、それぞれのテーマに対して、それぞれの支援者がいることを改めて実感しています。

しかし、私は田舎で生きて行くと決めて移住した人間のため、細分化されたコミュニティのようなものを田舎で求める事はしないでおこうと考えており、地域から共感を得て、共同パートナーを見つけていく為には、どうしたら良いのかということを考えていく必要があると感じています。

私の事業領域はまず1つ目に支援と言いながら、人口密度が薄いエリアでは難しいと会社を設立してから気づき、現在はプロデュース業に専念しています。地域資源を見つけ、その資源を活かすことができるようなビジネスに取り組んで、プロデュースをするということです。プロデュースをすることにより自分自身、ビジネスをするのは、どういうことなのかを日々学んでいます。

私は、田舎にある資源をサービス産業化させることを目指しています。例えば、田んぼであれば、田んぼからお酒を製造する等ではなく、田んぼがストレス解消の場所になるような開墾プログラムを行なうというようなことです。同じ田んぼであっても、違う機能や価値を見出していきたいと考えております。

2つ目はコミュニティビジネス支援をさせて頂いています。

地元でいうと、私は1次産業支援者だと思われることも多いですが、私は農業には特化しておりませんので、この地域のコミュニティビジネスの発展段階と言うロジックに学びながら、発展段階別に、サポートしていきたいと考えております。

3つ目に、地域作り支援ですが、私は自分の地域は支援しないと決めています。その地域では寄り合いがあります。その寄り合いの席であなた方を支援しますというように大上段に上る事はきわめて恥ずかしい行為ですし、また、そういう方々と共に歩もうとすると、ビジネスのシャープさが削ぎ取られてしまいます。

元気な高齢の方々が、この地域を盛り上げようとボランティアで立ち上がっ

ている地域ですので、私はその皆さんとボランティアを一緒にするのではなく、自分が楽しいと思うことのみに参加者として楽しませて頂くというスタンスが一番良いポジショニングであると、3年間かけて分かりました。

ですので、他地域に限り地域づくり支援の要請があれば、出向きたいと考えています。

具体的にどのようなプロデュース事業があるのか言うと、大きく4つあります。

1つ目は、ワンディ主婦のお店ということで、一つの直売所が徒歩5分の場所にあり、その直売所から相談を受けて、食堂を地域の皆さんが更に関わることができるように改革、改装したいが何かいいアイディアはないか、という相談を受けました。

その運営元は地元企業で、伊勢茶というブランドを作っていますが、会長や、スタッフの方と話を進めながらプロデュースしました。

難しい点は、日替わり主婦はこれを仕事としている人たちではありません。月に1回から2回しか来ることができないというのは、そもそも趣味でしかない状況です。

しかし、美味しい料理を提供してお客様を満足させる必要があり、趣味以上プロ未満の人たちのコミュニティーを応援しています。

重要なことは、主婦たちの輝きを応援するという目線にこだわってはいけな

いと思います。

お客様のニーズにできていかないと、主婦たちもやりがいが無くなっていきます。そのようなやりがいを求めているのであれば、あなた方を応援します。というスタンスでいて、平たく言うと甘やかしてはいけないと考えています。

次に、自転車のまちづくりプロジェクトです。

主人が自転車好きのため、現存する資源を使って里山資源のプロデュースを行っています。

まちづくりのプロジェクトは、誰のためのプロジェクトなのかという事で言えば、まちのためです。そして町民のためです。

しかし、町民が自転車にたくさん乗ると良いというプロジェクトではなく、町民が夢を見ることができる、あるいは自転車によって里山に入っていく人が増える、ということがゴールにならなければ、まちづくりとしての自転車へ理解が広がらないと思います。

町との連携や、教育機関との連携、そしてヒーローを生むというのは、どういうことかを大事にしています。特に教育機関との連携は、学校で交通安全教室を開催したり、自転車の学校ということで、自転車の安全、乗り方、そしてマ

ウンテンバイクの楽しみ方、スポーツとしての楽しみ方まで教える教室というのを運営しています。

マウンテンバイクレースというのもその延長線です。

マウンテンバイク専用のコースを誰も入っていなかった山に造っています。

これにより、山を探して求めている自転車愛好家と、使い道がなくて放置されていた山をマッチングさせたという例です。

ここのゴールとしては、単に自転車愛好家を満足させて、交流人口が増えたね、ということではなく、国際レースが誘致できるまでの質の高いコースにし、海外選手も来るようなコースにしようという目標になっています。

これによって、町の観光協会や商工会、の巻き込みを図ることができます。

質やオンリーワンを大事にすること。ここは日本で唯一の質の高いコースという誇りによって、実行委員会が盛り上がり、地元でも自転車に乗る人が増え、ここのマウンテンバイクコースがビジネスになる可能性を秘めているということです。

レースの開催単体ではさほど儲かりませんが、ステークホルダーの目線をあわせ、ここにしかない日本で一番良いものという誇りを培っていくことが最も重要であると考えています。

最後に、里山ヘルスツーリング事業を展開しています。

一般の健康意識のある人たちを呼んで、田舎の里山をサイクリングします。

自分たちがヘルシーな弁当を食べながら、里山を満喫し、プロに自転車の乗り方を教えてもらいながら楽しむというツアーを実施しています。

やはり大切なことは、ビジネスとして成立するかということであり、サービスや、モノに質が伴っているのかという点に事業者は徹底的にこだわらなければならないと思います。

良いことをしているからファンが増えていくであろう、という考えでは底辺は広がらないと考えています。

サービスを提供し、そのサービスが、どういう選択をすればニーズに応えることができるのか、どういうサービスを求めているのか徹底的にこだわらなければ、お客様を誘導しようとか、お客様を変容させることは、大変難しいことになります。

お客様を変えるのではなく自分たちを変えていくことが重要ではないか、サステナブルビジネスを考える上で、この頃強く感じることです。

村田 元夫 氏 株式会社ピー・エス・サポート 代表取締役

私は、中間支援組織を作らず、中間支援人材として動いていると言った方が正確かもしれません。取組発表して頂いた4名の方にも、ハンズオン支援や調査で関わらせて頂きました。

4つの事例内容は、自分たちの利益を優先するというよりは、関わる地域の雇用を創ることをされている点で共通していると思います。

私は、サステナブルビジネスを様々な形でサポートする仕組みを作っています。

どのような支援が大切かというと、サステナブルビジネスは、多様な市場にまたがっているため、一人の専門家が支援するのでは間に合わない。したがって異質な機能を持った複数の支援者により「よってたかって」支援できるような仕組みをこの地域でつくる目的で、事務局の一員として携わっております。我々が中間支援組織になるのではなく、中間支援組織の方にも協力して頂いて、このような仕組みにしています。いわゆる支援者だけではなく、ビジネスを展開されている先輩事業者にも混じって頂いて、一つの事業を支援していくイメージで進めています。

例えばNPOの方が企業に行って、寄付を貰いに行く場面があります。大手企業の社会貢献担当者からは、NPOの人はすごく恐いという声を聞きます。なぜ恐いかというと、NPOは様々なことを知っており、賢い。そして社会のためにどうするかという結構難しいことを考えています。それに対し、企業は、どうして動かないのかという、剣を突きつけられるように言われると、自分たちも一所懸命働いているのに、なかなか立つ瀬がないなと感じてしまうということです。

企業が持っている一番の資源は人材です。お金を寄付するよりも、その人材がどのようにNPOやサステナブルビジネスに資源として、関われる仕組みができるかということを企業は考えるようになっていきます。

企業人材あるいは行政職員が、時間外で自分たちのスキルや専門性を活かして、対象となる活動に貢献して行こうという人々をプロボノと呼んでいます。サステナブルビジネスとプロボノをマッチングさせる仕組みをサスプログラムという名で、中部地方環境事務所の協力の元、推進しています。今後、益々多くのサステナブルビジネスの支援事例を増やしていくことができればと考えています。

4 意見交換会

【意見交換会での意見】

(1) 地域づくりの活動に望ましい環境、必要な取り組み

- ・地域内循環していくことができる地産地消経済と、地域の特性のようなものを全国に売っていくことができる商品やサービス
- ・ビジネスの公共性と事業性の担保、バランス
- ・大きくしなくても事業として成立し、生活が賄えれば良いという選択と、良い物を広げて色々な人に理解してもらいたいというビジネスの選択
- ・金融機関が資金的支援をしようとする際に、事業に市場があるのか、売れる指標はあるのか。実現性が高いことや事業計画、具体的な説明が必要。(事業として成立するのか、しているのか)
- ・地域の未来を考えながら地域の未来のために事業を考えなければならない。地域の未来はこうしたい、だから自分たちはこのように生き残る、もし自分たちがいなかったらそういう未来は無い。
- ・自分たちが儲ける市場が無いことが始まりなので、それをどう埋めるかを考える事業計画。
- ・公共性が大事であり、どう表現していくか。公共性が強いがゆえに、第二顧客（寄付）、第三顧客（会員、協力者）をどうするか。それが金融機関の人に納得してもらえるか。
- ・事業を他地域でも展開するのであれば、プロジェクトを背負って立つ人が居ることが大事であり、事業として動かそうとする人も大事。
- ・地域に応援される側として、自分たちのサービスを楽しいと思ってやること。それを価値として提供することができれば、地域に喜んでもらえる。
- ・人口を増やすこと。1年に1家族移住できるくらいの雇用を地域に創出する。

子供が生まれる若い世代を暮らしの担い手として持続させる。

- ・私益でなく公益、今の社会の現状課題として育っていない部分、市場を創造すること。

- ・事業がどう展開して拡大したり、マーケットを作り出すかという指標と、地域のステークホルダーをどれだけ巻き込み、影響力を高めていくかの2本の評価軸を持たないと公共性と事業性の担保ができない。

- ・補助金や助成金を狙った活動になり、ビジネス志向が無くなってくるという状況も生まれ、ビジネスを起したり、マーケットを創造する際に行政の仕組み等が逆に弊害になることもある。

- ・外部資源との連携と協働。共有できる領域に応じた、志レベルで組む、相互にメリットがある相手と組む、ビジネスマッチングレベルで組むというように、戦略的分けて、ターゲットを決めて協働することが大事。

- ・地域の課題を解決する、地域の資源を巻き込んでいくいは地域の金融機関との取引が大事である。

- ・企業の事業は公共性があっても評価されない。公共性を評価する仕組みが必要。

(2) 中間支援組織の支援として考えられる事項

- ・ 誰がどのような価値を提供するのかという事を、資源として持って示す。
- ・ 仕組みを一緒に作っていく人、相談に乗る人たちの仕組み。
- ・ 本気になろうとしている人の背中を押せる。
- ・ 生身の人間が動きやすくなるような仕組みをつくる。どう支え合い、支え合いが広がる仕組みをつくる。
- ・ 同じ地域にいる同じ事をやろうとしている団体を繋げるきっかけを作る。情報提供、共有。
- ・ 各事業者はそれぞれ、今までできなかったことやろうとする意味では共通だが、事業者ごとに立場や状況が違うため、課題への対処方法はそれぞれ違う。それぞれに合った支援が必要。
- ・ 中間支援として上手くいった事例を積み重ねて、その中で共通することと、違う事を整理すること。
- ・ 公共性と事業性のバランスから、本当に必要なものはサステイナブルビジネスとして応援する。
- ・ 公共性の評価と事業性の評価をする。双方のバランスを支援。
- ・ 公共性の評価を数値化（SROI）していく。

5 まとめ

(1) 地域づくりの活動に望ましい環境、必要な取り組み

地域の活動では、地域の課題は地域自らが判断し、自ら決定し、自らが解決する力（自立）が求められる。そして、活動について支持・協力を得るには、取組の価値・成果を第三者に示していくことが重要である。

このために、地域づくりの活動に望ましい環境、必要な取り組みを列記する。

ア 地域づくりの事業を持続的に行うには、公共性と事業性について、第三者が理解し、納得できるよう表現することが必要である。地域の活動では考えている価値観がそれぞれ違うため、価値を第三者に伝わるような共通言語で示していく必要がある。

イ 事業に市場があるのか、資金確保はできるのか等事業として成立するのか、事業性を確認する必要があるが、事業性でなく寄付金又は補助金などの制度による活動が続けるのか、ビジネス的手法を重視するのかを判断すること。そのために、何に取り組むか、巻き込むか、それに応じた対応が必要となる。

ウ 事業者は地域に存在する課題や問題を把握することを重要視し、その地域社会にもたらす価値を成果として数値化して示すことが重要であり、示し方についても段階的に（①定性的②定量的③SROI）にしていくことが必要である。

エ 事業者の事業は、その地域の中でどのような立ち位置にあるのかを考え、地域にどのようなニーズがあり、そのニーズに応えるための地域資源は存在しているのかを見極めていくことが必要である。

オ 外部資源との連携・協働という手段として、志を同じくするのか、相互にメリットがある部分で組むのか、共有できる領域に応じて、戦略的分けてターゲットを決めていくこと。協働が目的とならないよう、事業者自身が自立するための手段として協働を有効活用していくことが必要である。

カ 取組が地域や社会にもたらす価値を成果として第三者に対して示していくこと、どれだけの成果を出すために、どれだけのもの（金）を投入するか目標設定が必要で、それを示さなければ収入なり資金を得ることは難しい。

キ 地域の課題を解決する、地域の資源を巻き込んでいくためには地域の金融機関との取引が大事である。

(2) 中間支援組織の支援として考えられる事項

地域の活動に対する支援として、中間支援の役割は、地域の課題を地域自らが判断し、自ら決定し、自らが解決する力（自立）をつけるための支援と、地域が地域の取組の客観的価値を示すことの支援が考えられる。

このため、地域づくりにおける中間支援組織の支援として、以下が考えられる。

ア 公共性と事業性について、事業者とともに検証し、そのことが第三者に伝わるような事業計画づくり、政策提言の仕方、進め方等の助言、事業者が第三者に発信するための指標づくりのための支援。

イ 各地域での取組の橋渡しのための共通指標づくり、共通言語づくり。

ウ 事業の公共性について、当事者からの表明では評価されにくいので、第三者として公共性を評価し、発信していく。

エ 支援を専門とする人のみでなく、様々な人と一緒に支援をしていく支援ネットワークを構築すること、他団体と繋がるきっかけづくりのための支援。

オ 地域の取組に参考となる様々な事例を類型化・モデル化して、事例の問題と解決策を見せていくこと。

カ 地域の価値を見るとき、第三者だからこそ見える価値があり、地域活動に第三者として入る役割。

キ 中間支援組織に必要なことは、地域の価値、ニーズ、事業者の価値・願いを把握し、成功事例を積み重ね、共通すること、異なることを整理して示していくことにより中間支援としての情報量と力量を上げることである。

(取組発表の様子)



(意見交換会の様子)



Ⅲ 環境 ESD プログラムの普及取組の在り方検討

1 概要

(1) 事前検討会

ア 日時、場所

平成 26 年 2 月 6 日 (木) EPO 中部

イ 参加者

井沢 令子 氏 NPO 法人 NIED・国際理解教育センター 代表理事
毛受 芳高 氏 一般社団法人アスバシ教育基金 代表理事
新海 洋子 氏 特定非営利活動法人ボランタリーネイバーズ
高橋 美穂 氏 中部地方環境パートナーシップオフィス
遊佐 秀憲 氏 中部地方環境事務所環境対策課
片岡 和則 氏 中部地方環境事務所環境対策課
赤塚 康司 氏 中部地方環境事務所環境対策課

ウ 内容等

中間支援組織関係者と、検討の範囲、内容、意見交換会の進め方等の協議・確認を行う。

(2) 意見交換会の開催

ア 日時、場所

平成 26 年 2 月 28 日 (金) 中部地方環境事務所 会議室

イ 参加者

18 名

ウ 内容等

◇ 地域プログラムの実証校の取組紹介

- ・富山市立古沢小学校 酒井 祥子 教諭
- ・金沢市立泉中学校 浜中 真希 教諭
- ・坂井市立鳴鹿小学校

(代理) 福井県安全環境部環境政策課 黒川 光憲 氏

- ・松本市立源地小学校 小室 邦夫学 校長 (欠席)
- ・東浦町立緒川小学校 原 伊津子 教諭
- ・岐阜市立長森南中学校 長屋 亮司 教諭
- ・名張市立薦原小学校 松田 淑子 教諭

◇ 標準化プログラム採択団体の取組紹介

- ・富山市立中央小学校 深井 美和 教諭
- ・豊田市立西広瀬小学校 林 宗弘 教諭
- ・岡崎市立新香山中学校 山内 貴弘 教諭
- ・環境ボランティアサークル亀の子隊 鈴木 吉春 氏
- ・あいち国際理解教育ステーション 今枝 明子 氏

◇ 中間支援組織等関係者の紹介

- ・NPO 法人 NIED・国際理解教育センター 伊沢 令子 氏
- ・一般社団法人アスバシ教育基金 毛受 芳高 氏
- ・金沢大学環境保全センター 鈴木 克徳 教授
- ・特定非営利活動法人ボランタリーネイバーズ 新海 洋子 氏

◇ ワークショップ

ワールドカフェ「学校で、地域と連携して、どう ESD を展開するか」

(4) 取りまとめ

ア 日時、場所

平成 26 年 3 月 11 日（火） EPO 中部

イ 参加者

井沢 令子 氏 NPO 法人 NIED・国際理解教育センター 代表理事
毛受 芳高 氏 一般社団法人アスバシ教育基金 代表理事
新海 洋子 氏 特定非営利活動法人ボランタリーネイバーズ
高橋 美穂 氏 中部地方環境パートナーシップオフィス
遊佐 秀憲 氏 中部地方環境事務所環境対策課
片岡 和則 氏 中部地方環境事務所環境対策課
赤塚 康司 氏 中部地方環境事務所環境対策課

ウ 内容等

意見交換会を踏まえ、次について中間支援組織等関係者と検討・協議の上、取りまとめる。

- (ア) 学校・地域が環境 ESD プログラムに取り組む理由
- (イ) 学校・地域で環境 ESD プログラムが取り組まれていない理由
- (ウ) 学校・地域が環境 ESD プログラムに取り組むために必要な事項
- (エ) 環境 ESD プログラムが地域で広くとりくまれるための中間支援組織の役割

2 環境プログラム関係者の取組内容紹介

【富山市立中央小学校 深井美和 教諭】

私にとってE S Dとは、つながることと、自ら行動すること。
それが私の柱であり、4・5年間取り組んで痛感している事です。
タイトルの「レッツゴーエコキッズ」にありますように、エコ活動に取り組んだもので、作った時の狙いは、友達や家庭、地域の人々と共働すること。そして具体的に実践する態度を身に着けてほしいと願い、実践・取り組みをプログラム化したものです。

4年生の子供たちは、社会科でゴミや水の学習をします。ゴミがどこから来て、どう処理されていることや下水や上水道のことも学習します。

各都道府県や市町村によって仕組みや、自治体の取り組みも違いますが、それぞれの子供たちが社会見学に出かけ、そういう現状を知り、そのことを座学的の学びだけで終わらせるのではなく、何か自分にできることを考えて実践するところまで持っていきたいという点です。

友達と共に考えたことに、保護者、家庭を巻き込んで実際に日常生活の中で行動すること。ごみ処理にしても、水にしても、行政を通らないと私たちのところには、きれいにはならないし、安心した水も飲めないということから、地域の人々と連携しながらいっしょに考えていくということを、捉えてプログラムを作っています。

お勧めな点としては、ちょうど4年生が10歳なので、10歳の子供が、10個のエコ活動に限定してとりあげ、それを10週間とにかくつづけていく形で、富山県の方では、環境チャレンジ10という取り組みを、県が指定し、指定校というのを作っています。

その指定校に最初になったこともきっかけであり、本校ではあえて、希望して毎年4年生になったらこのプログラムをするように決めて、5年間連続して取り組んでいます。

その10個の取り組みは例えば、県の事業も絡んでいることもあり、富山環境チャレンジ10取り組みノートを活用しています。簡単な内容でコンセンートを抜くとか、無駄な明かりを消すとか、そういうような取り組みですが、まず子供たちもたくさんある取り組みの中から、自分たちでできそうなものを選ぶ。選ぶときには、必ず家族と相談する。24個ほどのこういうものが、提示されています。

こういうのは色々なエコ関係の雑誌とか、教科書とかにも載っているようなものですが、それをするによって、ちょっと二酸化炭素これぐらい減らせ

たとか、自分の家庭では家族4人力をあわせたらこれぐらい減らせた、クラス全員だったら何kgぐらい減らせた、学校中みんなで行き組んだらこれぐらい減らせた、というふうに、数値化して子供たちへかえってくるので、より取り組みが明らかになる。またこれを終了した10週間後には「環境大臣」に任命します。

認定書も、富山県はライチョウという鳥が有名なので、「ライチョウ大臣」より任命されるといった、楽しい取り組みも一緒に合わさっています。

他県で行き組んでいただくときに、必ずその各県には、環境に関する取り組みは、やっておられるところがあります。出張講座とか、出前授業みたいなものを、どれぐらいやっておられるのかわかりませんが、そういうものと連携して行く。また、そういうものがまったくなかったとしても、社会科の学習資料集等を通じて、クラスの中や、学校でこのエコ活動を選んで行く組んでみよう、そして、学習参観やバザーなどの場で保護者や、地域の方に、こんな取り組みを学校でやっていることを知っていただき、是非いっしょにやってみませんか、声掛けすれば変わってくると思います。

5年間行き組んだ変化として感じているのは、地域のごみ置き場など、クラスなどにつつかれないように対策をとっていますが、富山市では生ごみを出す日が決まっており、生ごみもリサイクルされています。子供たちが生ごみをつくるクラスが、そこを荒らしていかないように登下校中にネットを直していくような、些細な行動でも、子供たちがやることを地域のお年寄りが見てくださり、今の小学生はこんなことをやっていた、じゃあ出す側の大人もこういうふうに気をつけていかなければいけない、なんていう話も聞かれたりするとところがうれしいなと思っています。

【あいち国際理解教育ステーション 今枝 明子 氏】

国際理解教育のワークショップを提供する活動をしております。
プログラムをつくり、そのプログラムを実行するファシリテーターの派遣をさせて頂いております。本日は普段行なっているものについてご説明します。

最初の方に私たちが初めて行き、初めましてというところから始め、2時間で子供の気持ちを高めて、興味を持ってもらわなければなりません。
アイスブレイクでは、雰囲気を柔らかくするため、今回の場合は、環境といってもグローバルな視点の物を持っていけますので、子供たちに世界のことにについて知ってもらう目的で国名集めから入ります。

子供たちの知っている国には偏りがあり、先進国の名前は知っているが、途上国と言われるところはほとんど知らないということが浮き彫りになります。
その後、クイズとウェブを行います。

もし水がないとどうなる、ということを模造紙にみんなでどんどん書きます。
そうすると、書いていく活動により一気に子供たちの頭が働き始めます。
自分で考えることで、そこから集中力が生まれてきます。また、これを行うことによって、因果関係のトレーニングにもなります。そして、結論としては水がないと、とても困るねということが分かってきます。

埋まった紙を見て達成感があるというところで、頷いても、まだ彼らにとっては水が手に入らない状況ということは分からないわけです。

その後にクイズで、例えば地球にある使える水の量ってどのくらいだろうと
いうことを行い、ペットボトルの水を地球全体にある水とするならば、使える
水はどの程度であると思う、といって計量カップや計量スプーン、箸という小
道具を用いてどのくらいであろうかと進めていきます。

途中で日本人が使う一日の水の量の比較という項目で、著しく少ないアフリ
カが出てきます。

そこから途上国の状態を見ていきますが、水が少ないところでは当然、水を
運んで来なければならず、子供が運んでいる写真を見せた後、実際に水運び
を子供たちにしてもらいます。それはできるだけ多く、できるだけ長く、でき
るだけ遠い距離を体験してもらおうと良いのですが、なかなか時間的に難しいた
め、そういうことを、もう少し行うことができればと良いと思います。
そして、子供の場合はあまり考え付かないですが、汲んできた一杯の水で、一
日その子たちが暮らすとしたら、その水をどうやって分配するか、ということ
も聞きます。

すると、衛生的なところには、ほとんど使うことができないと分かります。例えば、トイレの水は流せない、洗濯できない、顔を洗うのも難しい、ということが見えてきます。

この衛生問題から、下痢で死んでしまうというような状況の話に入ります。その下痢で死に至らないようにするため、画期的な魔法の薬があるという話をします。

それは、ORS という経口補水液ですが、それを作るということをします。子供は魔法の薬だよというのを見せるとドキドキワクワクして飲みます。飲んでみると大概、不味いと言います。それを何かの味に似ていないか、と問うと、ポカリスエットとかアクエリアスという言葉が出てきたりします。これを開発したのは日本の大塚製薬という会社が、このような状況があること知って考えたということを伝えます。それでも死んでしまう子は多い。実はその村は貧困であるとか、様々な状況があることを、写真を見せて説明したりしています。この時、子供たちは非常に食いつくようにして見ております。そこで終わると話が暗くなってしまうので、中学生ぐらいですと、どのように解決したら良いのということを考えてみて、それをマトリックスで評価するというようなことをします。

実際は、こちらが解決カードを用意して、もし選ぶとすればどれが一番な効果的かということをグループで考えて話し合います。

このプログラムは、いつでもどこでも行うことができ、バケツさえあれば行うことができます。

都会のような自然が無いところでも可能であり、学年に合わせて、どのようにも方法を変えることができます。体験を組み込んでいるため、より心を動かされて記憶に残るものになっているのではないかと考えております。

【豊田市立西広瀬小学校 林 宗弘 教諭】

場所的には愛知県を南北に貫く矢作川という川が流れていて、河口から 50 km 程の中流域にある学校です。

豊田市は西暦 2000 年に東海豪雨により、あと 30 cm 矢作川の水が増水していたら豊田市は壊滅していたであろうと市長等が心配し、森を保全・整備する必要があると考え、森林課という課が出来ました。

森林行政が進められており、間伐を一生懸命行なっておりますが、なかなか計画通りには進まないという現状があります。そういう中で、里山も全国的に高齢化が進んで、水田が耕作されなくなったり、山の手入れがされなくなるといことが進んでいます。

学校のすぐ隣に運動場から高さが 30m ほどの小山があり、そこはかつて炭焼きで伐採されていた山でした。そこには竹が入ってしまい登れない山になっていました。

この山を復活させようという試みと同時に、山の向こう側にある休耕田となっていた田んぼ 10 枚ほどをもう一度、子供たちの手で稲作を復活させたり、再生できないかと考え、全体をビオトープにしようと、この活動を始めました。年 4 回の観察会や、生活科総合的な学習の中で、そのビオトープを活用するようになっていきます。

トンボの数が非常に多く、トンボは茎の中、泥の中、乾いた泥、水を含んだ泥、水が溜まった所など、多様な環境の中で、種によって産卵場所が違います。多数のトンボが生息しているということは、それだけ環境に多様性があるということになります。トンボがたくさん飛ぶビオトープということで、進めることが出来るようになりました。去年はハッチョウトンボという日本で一番小さいトンボを発見することができたり、百合や桔梗が咲いたりする場所も分からなかったところに光を当てることが出来るようになった気がします。

4 年生頃から森に入って、木を切る間伐体験を通じて森を整備するという学習も進めています。その中で、森と川と海がつながるということを学習し、海へも勉強に行きました。

海の生物の多様性は私たちが住んでいる森が生み出し、その水が行っているんだねという学習に繋げることができました。

最も良かった点は、子供たちがビオトープが大好きだと言って、しょっちゅう遊びに行くことが増えたことです。

そして地元紙にも取り上げられたことにより、地域住民の方々が、百合がまだこの谷にあるのか、それほど貴重なトンボがいるのか等、価値を認めて下さるようになりました。地域の財産、故郷の宝として、地域の方々に守っていっ

て頂くことができるような、ESD 的な取り組みが出来たのではないかと考えています。

【岡崎市立新香山中学校 山内 貴弘 教諭】

なぜ ESD かと言うと、学校再生により学校が荒れないように、ガラスが割れないように。それが初めに目指した原点でした。

岡崎は環境学習プログラムというものがあり、年間 15 時間行ないます。分野を自然環境だけでなく、ESD 的な持続可能な未来社会に向けての環境が大事であるというコンセプトになっております。

学びのフィールドも資源循環もあり、低炭素型もあります。小学校は生活科で自然と遊ぶというような自然調和型、そういうものが 15 時間のパッケージの中に入っています。

新香山中学校は特に、地域教材を活用すること、探究学習で教員支援をどのようにするか、教員が授業の中でどう仕組んでいくかという ESD 的な手立てを組むべきということで、授業改善をしております。

山の近くにある学校ですが、その山で子供が今までは、あまり意味も解らず下草刈りをしていました。地域で新興住宅地もあり、少しアンバランスのような感じのところでもあります。自然調査をすると野菜類がサルやイノシシに食べられ、地域の人々は困っています。

そのような状況が分かり、私たちのプログラムでは、地域を知るということで、生物の流域図が重要になります。外来種等はどのようにになっているか、希少な生き物はどうなっているか、自然環境に良い建物や悪い建物は何か、という事を浮かび上がらせることにより探求がスタートしてのではないかと考えています。

年間 400 頭程のイノシシを地元の山で駆除している猟師に話をしてもらいます。子供は、ものすごくイノシシを恨みますが、ウリ坊は山に帰してあげれば良いという事も話します。

そして、イノシシ鍋を食べさせてもらったりもしています。

命を粗末にしない猟師の姿勢に共感して、共生社会とはどうあるべきかを考えていくプログラムです。

自然を感じる感受性や子供の倫理観、学習指導要領下ではなかなか育成できないとされる自己肯定感、21 世紀型スキル等が、上手く入り込む、落とし込めるように実践を積み重ねています。

自分たちが行なっていることが一般化されていくようで、職員も喜んで取り組んでいます。

【富山市立古沢小学校 酒井 祥子 教諭】

この学校はすごく山の麓にある学校で、そこで里山についての学習をしました。それで、私にとってESDとはと言われているのですが、あまりそのように考えたことがなかったため、子供たちの未来に少しでも何か残ればいいかなと考えています。

うちの学校は、呉羽山のすぐ麓にあり、毎日呉羽山が見える環境にあります。子供たちにとっては、身近すぎるためか、意識があまりありませんでした。実は大変自然豊かであり、豊かな自然に子供たちが気づく、そして少しでもそこで命が育まれている事、命や山を大事にしていきたいという気持ちを育てることができれば良いと思っています。

そこで、呉羽山の麓にはファミリーパークという場所があり、そこは自然を生かして地域を巻き込み、富山の自然を大事にしていこうという動物園です。その中にきんたろう倶楽部という環境保全活動をしているところがあります。全く知らない呉羽山に自然観察に出かけ、呉羽山は良いところであるということを実感する時間を取りました。昔からそこに住んでいる方に、話を伺う機会を設け、今もすごく良いが、昔はもっと自然が生かされていたという話をして頂きました。

昔と比べ、実は環境が破壊されているということを感じ、自分たちで何とかしていきたいという方向へ持っていき、ファミリーパークの中にある環境保全活動をしているきんたろう倶楽部の協力を得て竹伐り体験をしました。ただ切っていくのではなくて、なぜ竹を切るか等、子供たちが疑問に思った点を聞きながら行いました。竹を切るということは非常に大切で、竹を1本切るにしても、どの竹を切ればいいのか等、すごく考えられている話もして頂きました。

子供たちは山に対して働き掛けたという満足感を持つことが出来たことによって、呉羽山を身近に感じ、これからも大切にしていきたいと言っていました。そこから、行動にどう繋がっていくかは分かりません。早速、明日からゴミ拾いをしようとはならないかもしれませんが、心のどこかに残っていて、山を見に行こうかなとか、ゴミが落ちているから拾ってみようかなとか、将来大人になった時に、自分たちの呉羽山が荒れてきたから何かできないかな、とう形で参加できるようになるのも面白いかなと思っています。

【金沢市立泉中学校 浜中 真希 教諭】

泉中学校は、中心地の少し南にある中学校です。市内の中心部ですが、市内で3番目ぐらいに小さい中学校です。一学年で170人います。この170人で総合的な学習の時間を中心にESDに取り組んでいます。

あなたにとってESDとは、という質問が難しく、答えが常に変わっていきます。

3年前に突然私が担当になり、始まったESDですが、学校の中で分かるのが校長先生しかいない状況から始まって、聞こうにも誰にも聞けないところから勉強し始めました。その中で自分の発表会資料を取り寄せたり、インターネットを見ながら参考にさせて頂いていた学校の先生方が今日はお越しになっていて、大変嬉しく思いますが、常に勉強しながらどんどん答えが変わっていきます。何となく、自分の中心にあるもの、学校の中心にあるものかなと最近は思っています。

4月のスタート時に環境学習を泉中学校では半年間行います。簡単に言えば昨年までは、毎年ネットなどで調べてまとめるという授業でした。それをなんとかしたいということで、4月スタートしたときに170人を7つのグループに分けまして、水、エネルギー、ゴミ、空気、食、森林、生き物の7つの自分の興味のあるところのグループに所属し、7つのグループごとに市内へインタビューや調査や体験、そういうものに繰り出して、課題解決をしていくというプログラムを今年行いました。

それがいよいよ9月ごろに終わりました、終わったと思っていたところにこのお話をいただいて、せっかくお話をいただいたのでその中のどれかグループをさらにもう少し掘り下げていこうということで、グループの中の食のチームをそのあと6時間の授業を展開しました。

食のグループの子たちは、農薬が環境に及ぼす影響とか、農家を訪ねてインタビューしたり、県の保健センターでその農薬の検査を見てきたりしながら、学習を進めて来た子たちを、もう少し目の前の身近な泉中学校の校区内を見てみよう、と食文化にかかわる校区内へフィールドワークに出かけました。

実際にお酒から酢に変化させて8か月もかけて作っているお酢屋さんがあったり、味噌も地元の大豆を使って作っているところがあったり、かぶらずしを作っている老舗が目の前にあったりします。フィールドワークへ出かけながら、糍というものが金沢の食文化に欠かせないものであって、それが日本海側の環境と大きく結びついているのではないかとということで、学習を進めてきました。進める中で、昨年までのインターネットで調べて、まとめるという学習に比べ、地域についての取組をすることができたと思っていましたが、もっと近いとこ

ろをみてみようというのが今回大きく、地域に多くの財産があることが分かりました。

また、映像を YouTube で家庭でも見てもらうようにしました。家庭の方から、アンケートを取り様々な情報が寄せられて家庭の方とも繋がることが出来ました。その意味で地域や家庭が近く感じる事が出来た今回のプログラムでした。

【福井県安全環境部環境政策課 黒川 光憲 氏】

鳴鹿小学校の代理で参りました。校長先生の代わりに取り組み事例の紹介をさせていただきます。

この事業については、子供の喜んでいる顔も良いですが、悩んだり、真剣に考えていたりする姿が最も良いのかな、そこが出発点なのかな、と感じています。

まず、この授業についてですが、実質3ヶ月程しかなかったため、余裕が無く、辛かったということです。

そのこともあり、学校側が、この授業の趣旨を汲んで出来たのかという不安があります。それからこのESDの授業を受けたことにより、担任が子供の興味関心の喚起の手法を学ぶことができ、これが教員の人材育成に繋がったと考えています。

また、今回の授業を通じて非常に有難かったことは、福井大学の前園先生に指導者として来て頂き、頻繁に学校へ来て下さったことが非常に有難く、それが成果として出てきているということです。

そして、映像を使ったことにより、今まで知らなかった子供たちの視点が広がったと感じています。

鳴鹿小学校は2002年にビオトープを作り、その後だんだんと荒れてきていました。

誰も見向きもしなかったビオトープにESDを用いて取り組んだことにより、子供たちの関心が非常に高まったということです。他の学年の子がビオトープの池に、雪の玉を投げ込んだところ、ESDを行なっている3年生の子供たちは、投げ込んだ子に対して喧嘩をしてしまった事がありました。そのぐらい大事にしているということが、成果として出てきています。

様々な課題がありますが、今後、理念が引き継がれていくかどうか、校長先生の立場としてそういう心配をしています。継続していくためには仕掛けが必要であり、

今回は、その大きなきっかけになったと感じており、嬉しく思っているそうです。

それから、今回は3年生が行ないましたが、他学年を巻き込み、複数学年で取り組むようにしていく必要があるのではないかとということです。

鳴鹿小学校は、昔から住んでいる方と、新しく来た方、いわゆる都会の方との間で様々な摩擦等もあり、学校の中も最近落ち着きがないという話も耳にしておりました。

このような取り組みにより、地域の方からも信頼される学校、地域に開かれた学校になっていくための一つのポイントではないかと思っております。

【東浦町立緒川小学校 原 伊津子 教諭】

本校は総合の学習を長い事行なっておりますが、どうしてもマンネリ化してきて、体験だけで終わってしまうような学習になりがちでした。そんな時に ESD に出会い、何とか本校の総合を探究的な学習にしたいと思って、ESD の視点を入れることによって探究的になるのではないかと考え、ESD に取り組み始めました。ひいては未来に響く子供たちの力になっていくと思っています。

実践した授業の工夫点は、4 年生で環境の学習をして、学習をまず自分事に行いたいと思い、環境の活動を募り地域に出かけて行ってゴミ拾いをするとか、近くの川に入って清掃活動をする、そのような活動もありますが、まず自分の一番身近な校内のエコチェックをするということで自分事にするということを行いました。

そして、校長、教頭、学年担任も出演した映像資料を活用したという事も工夫した点です。

参考にさせて頂いたのは、富山市立中央小学校のレッツゴーエコキッズのプログラムです。前半はやはりクリーンセンター、ストップ温暖化教室等の様々な学習を通して知識等を身に付けて、それを実践しようというところになります。

緒川小学校はエコな小学校であろうか、と問いかけたところ、子供たちはそのような視点で学校を見たことがないため、答えることはできませんでした。そこで、調べに行こうということで、5 つの項目を立て、自分の興味を持ったチームに入り、校内のエコチェックを行いました。それが、電気、ゴミ、水、自然・生き物、環境活動です。

それぞれをチェックしますが、漠然と見るだけでなく、やはり観点が明確である方が良いと思い、それぞれのチームに 5 つずつ観点を示しました。

これについては、いしかわ学校版環境 ISO 取組項目を参考にさせて頂きました。それで校内を調べました。

5 つの項目の中で最も出来ているものを「緒川小エコじまん」、それから、最もできていなかったものを「ざんねんエコ」として調べました。

それをそれぞれのチームが「ざんねんエコ」を何とか直していこうと、一週間活動をしました。その結果を最終的に報告するというのが、今回の実証授業です。

授業の流れは、まず、最初に行なった校内エコ活動、エコチェックをしているところの映像を見ました。そして、それぞれのグループの一週間、ざんねんエコを改善する活動の発表会をしました。それをゲストティーチャーである NPO

法人もりの学舎自然学校の浜口祐子さんに聞いて頂いて、専門家の立場から、自分たちの行なったエコ活動はどうだったかということを見て頂きました。その後、自分のグループの発表をし、他のグループの発表を聞いて、緒川小をもっとエコにするにはどうしたらいいかということで自分の意見をまとめ、意見交換をしました。

話し合っていくうちに学校の中でもエコにしていける必要がありますが、それを数多く家庭や、地域に広めていくことも大事であるというような意見も出ました。

この授業より少し前に「おがわっ子フェスティバル」という行事で環境について学んだことをクイズ形式にしたり、ゲームにしたりして発表しました。そこには児童だけではなく地域の方、家族の方もいらっしゃるため、実は家族とか地域にも私たちは発信していたということを実感しました。生活の様々な場面で2つの中から選択するという点に目を向け、日常生活にも地域にも広めていくことを考え、最後に「わたしのエコ宣言」ということで、自分たちの考えをまとめてゲストティーチャーの浜口さんからお話を聞いて終わりました。子どもたちは、本当に自分事になった課題について一生懸命取り組みました。コピー用紙で両面が白紙のものか、片面使用したものを再利用する方が良いかという点で、子供たちが、意外な意見を出したことが想定外でした。

普通に考えると白紙よりも裏紙を使った方が良いという意見を想定していましたが、子供たちはリサイクル紙の方が更にエコであるとか、大事なプリントであれば裏表に印刷することにより、かえって混乱するのではないか、という意見も出て、そこで話し合いが進みました。

これは、E S Dでもよくある正答の定まっていない考え方があり、それをお互いに共有するような話し合いに発展していきました。

単元が終わった後も、子供たちはエコが身に付いたようでした。

例えば、何となく教室が薄暗いなど感じた時は、実は子供たちが積極的に教室の電気を消していたり等、学習が終わってからエコの日を決めてみんなでチェックをする習慣へと繋がっていきました。

また家庭の方にも実践を広げていっていると思います。

【岐阜市立長森南中学校 長屋 亮司 教諭】

元々、ESD の話を頂いた時は、正直お断りするつもりでおりました。うちの学校に入って環境教育を行なって頂いている地域の方で小林由紀子さんという方から一緒にやりましょうというお話があり、では無理なくやりましょうと考え、始めました。

持続可能にするためには、無理なく行なうことが大切であると考えています。本校は1年生で環境、2年で福祉、3年生で国際理解と決まっていますが、そのテーマに沿って行ないませんが、これら今で言えばESDですが、廃れていってしまうということです。何をしようかということで、唯一廃れていなかったのは、小林由紀さんとコラボレーションした活動です。なぜ廃れないかというと、小林さんと学校が、良いと感じたものを随時加えていくからです。もう10年目になります。

10年目にして、教員は変わりますが、息づいている活動は残っているという、これが持続可能な総合的な学習であると思います。無理なく無駄なく、特別なことはできませんという考えで、今やっていることで良ければ出来ますという取り組みをしました。

学校目標が、自立ということで、今回どっちゲームを行ないました。どちらを選択しても構わないが、あなたはこうすると言われたときに、自分が判断することができる力を学校教育として与えておくことが出来れば、将来判断したり、プラスの方を選ぶ際に役立つのではないかという期待を込めて行なっている事を学校全体として理解することができた事が最大のメリットです。うちの学校は岐阜市にあり、40万人の都市で住宅地や畑や田んぼが混在しているようなところです。年々汚れてはいますが、長良川という清流があり、泳ぐことができます。

市内で泳ぐことができる場所は、なかなか無く、それほど自然が豊かな場所であるという事を子供たちに教えたいと、この活動を始めました。宿泊研修に本当に清流の上流である郡上へ行き、自然の美しさを感じます。そして、地元に戻ってきて今度は自分たちの地域の川を見ると、支流であり生活排水の影響もあり、郡上に比べれば汚れていることが分かります。

しかし、地域の川もまだまだ綺麗であるということを感じるために、全員で川に入って魚類調査をします。そうすると見たこともないような魚を発見することができました。また、トノサマガエルとよく似たダルマガエルという希少種を発見したりと、様々な活動が続けてきました。

今回、この実践ではフィフティ・フィフティという外部講師の授業を教員がサポートするという形で行いました。

本校の屋上に市や県の施策で設置された太陽光パネルがどのように利用されているかを学んだり、子供たちと一緒に担任が電気自動車に乗車したり、発電を体験したり、そのような活動を学校だけでなく、様々な人がサポートして下さる状況が出来たことが、持続していくことができる要因の一つであると思います。

【名張市立薦原小学校 松田 淑子 教諭】

自分の考える ESD とは、地域愛かなと、自分の中では考えています。
今回の授業は、こちらの意図を含んで頂いた映像を何本か構成をして頂きましたし、ゲストティーチャーさんの思いを知り、それを生かせる授業になったと思います。

子供たちは、自分の住んでいるところが客観的に何となく好きであると思える授業になったのではないかと思います。

子供たちは、今ある自然を当たり前のように思っていると思います。もう一步踏み込み、当たり前を一步立ち止まって考えるという授業にしていきたいという思いからスタートしました。

悩んだ部分は、4年生の授業のゴール地点を何にするか、よくあるのが、自分たちでできることを考えて、この授業を通して何をゴール地点にしたらいいかというのは、ワーキンググループの方とか、様々な人の中で話をしながら自分の中でも悩みながら、授業を構成しました。

第5回ユネスコスクール全国大会の ESD に参加した際に、ゴール地点をどう考えられますかということをグループ討議で聞かせて頂き、4年生の子供にあった自然体のゴールで良いのではないかという意見をもらい、少し気が楽になりました。

自然に持っていくことができれば良いなという気持ちで、あえて引っ張る必要はないのかもしれないという気持ちで授業を組みました。

授業はギフチョウという蝶々、アゲハチョウに似ている蝶ですが、これが市の天然記念物に指定をされています。この学習を3年生、4年生で6年前から行っております。

ギフチョウを守るネットワークが、うちの学校で授業をさせてほしいということで、地域外の自然保護団体の方が是非にということからスタートした学習です。

4年生の1学期でこの学習が終わっていて、春にしか見ることはできません。この期間に見学に行ってギフチョウに出会って、そこからまたインターネットで調べたり、まとめたり、学習発表会で1学期の発表をして終わりという流れでした。

このお話を頂いて、学習に広がりが出たと感じております。地域を愛するとか、そこに広がった授業が出来たことが良かったなと思っております。
この学習を通じて、子供たちが6月と9月に、地域を見るということで、探検に行きました。

活動となると、子供たちはインターネットで調べるよりも、すごく意欲的で、みんな家からタモを持ってきました。様々な昆虫・植物の名前を聞くことによって、自然と触れ合っていくことができました。自然と触れ合うことによって、運動場で絶滅危惧種のニッポンハナサカバチを子供が発見したことありました。これは大発見ということで子供たちも意欲が更に湧いてきて、次はこの思いを誰かに伝えたいということになって、「コモコモふれあい祭り」という地域密着型のイベントで保護者や地域の方に発表しました。

体験してさらに調べ、発信して、また探検に行って、このようにスパイラル的に学習ができる教材であったと思っています。

4年生のゴール地点をどこにしようかという点で、映像を使うことによって2つの効果がありました。

ギフチョウが生息して飛んでいるところの真横に工場地帯があり、その映像を見せることにより、ギフチョウにとって排ガスが大量に出ているダメなのではないかという感想を子供たちが持つかと思いました。

しかし、中には工場が無かったら自分たちは生きていけないという発想を持つ子もあり、自分たちとの生活が半々に共存できることが良いという、共存の部分を映像を通して子供たちが発見できたことが1つ目の効果です。

2つ目は、ギフチョウネットワークという、ギフチョウを守ってくださる方が、ギフチョウと自然を守ってくれていると皆が思っていました、実は自分たちの自然を守ってくれているのは地域の人であることが子供たちに伝わったことです。

映像の中に自分のおじいちゃんが登場する場面を入れると、

「あ、ぼくのおじいちゃん、映像に映っている」というところから、何か聞きたいことありませんか、といった時にその子が「ぼくのおじいちゃんは、自然を守るために何をしていましたか？」という意見が出て、地域の人がギフチョウというのを知らないけれど、自然に守ってくれていた。人間と自然のバランスがこの地域にはあるということが自然と分かったことです。

【環境ボランティアサークル亀の子隊 鈴木 吉春 氏】

渥美半島の伊良湖岬の近くの浜でゴミ拾いを基本にして、活動をしている環境ボランティアの亀の子隊という団体を運営しております。

亀の子隊は平成 10 年から「西の浜はゴミ箱じゃない」をスローガンにして、西の浜クリーンアップ活動を基本に、きれいな海を守りたいという活動をしています。

そうした中で、きれいな海を守っていくためには海の大切さと良さを多くの人に知って頂く活動を進める必要があるのではないかと考え、体験的環境学習と、海の環境を学ぶプログラムを進めました。

それから手紙作戦や広報活動に力を入れていきました。きれいな海を守る心を広げる必要性を改めて感じて、亀の子隊の活動を見直し、3つの視点できれいな海を守る心を育てるプログラムを進めています。

1つ目は海の大切さ、海の良さを知る体験的な環境学習プログラムです。ここでは、渥美半島の海の学習のステージとして、6回から7回のプログラムを実施しています。体験的な環境学習で、大切なことは、こちらから知識を教えるのではなく、子供たちが自ら考え、感じる事が出来る活動の場所を与えることであると思っています。

子供たちは活動を通して海ってすごいな、海っていいなと感動します。体験的環境学習は、そうした感動を与えることが大切だと思います。そうした感動体験は、海にごみを捨てない心を持ち、将来にわたって、海のよりよい環境を守るために、行動する子供たちを育てることに繋がっていくのではないかと思います。鳥羽へ水族館見学に行ったりしています。

2つ目ですが、気づきを伝える広報プログラムです。毎年 100 件ほどの事業所や企業にきれいな海を守る活動に協力してくださいという手紙を送ったり、ゴミがいつぱいの西の浜の現状を伝えるための、パネル展示をしたりしています。上流域のみなさんにゴミを捨てない気持ちを伝える大切なプログラムです。（映像で）抱えていたのはスナメリの模型です。スナメリの模型を作りました。

中心になるのは「西の浜はゴミ箱じゃない」をスローガンにした西の浜クリーンアップ活動を進める海の環境を守るための自然美化活動プログラムです。今回 ESD プログラムに選んでいただいたのは、この活動を学習プログラムに構成したものです。

平成 10 年から「西の浜はゴミ箱じゃない」をテーマに行っている西の浜クリーンアップ活動は、来月 3 月の活動で 200 回となります。ゴミの量は 55000 k g

ほどになります。人工物のみで、流木は入れていません。今年の参加者はおかげさまで2月までで1150人となりました。

活動してみて思うことは、海はやっぱりゴミは嫌だなと思っているだろうなと、ということです。

だからゴミを吐き出す、吐き出せばいいかなと思っています。それを拾うのが私たちの責任でもあると思います。

今日のこの会に限りませんが、クリーンアップ活動はただのゴミ拾いのボランティア活動ではなく、海のきれいさを守るための大切な活動であり、きれいな海を守りたいという思いを育てる体験的な環境学習です。こうした活動が、持続可能な発展のための協議ではないかと考えています。

それは地域を愛する心を育て、より良い自然環境を作り出し、将来に向けて持続可能な社会を創造する力を育てるということです。

亀の子隊としてはこれからも西の浜クリーンアップ活動の中軸にして持続可能な社会の為にきれいな海を守る心を広げるためのプログラムを進めていきたいと思っています。

3 意見交換会（グループワーク、参加者の感想）

【小学校 1 班】

＜鳴鹿小学校、緒川小学校、中央小学校、金沢大学環境保全センター、株式会社 TREE＞

発表内容

最初映像の話をしていました。

よく考えると映像って昔から使っていたね。NHK の番組、視聴覚教材の番組見ていたという話から始まりました。それがデジタル教材になって共有出来ると良いという話をしました。

映像を使った効果はどうだったか。初めてのことだったので、難しいこともあり、長さも余り長いと、子供が集中出来ない。2 分ぐらいが良いのではないかと。

その映像を作るのは誰なのか、期間はどうするのか、という話し合いをしました。それを家庭でも見るようにとということで、youtube 配信出来るようになった。学校と家庭が結ばれ、地域と結ばれていくことが確認出来ました。

映像教材だけでなく、実体験も必要で、両方のバランスも考えていきたい。そもそも ESD って何だという話に飛び、これは特別なものではない、生きる力そのもの、それをまとめていくものであり、教育の本質であるという話がありました。

では、その ESD が様々な学校、多くの学校に広まらないのは何故か、どうしたら広まるのか。

鈴木先生からもユネスコスクールになった学校には、学校の教育方針に ESD という言葉を入れて下さいということをお願いしている。学校全体、学校ぐるみで ESD に取り組むことが大事であり、そういった ESD に取り組むという意識や、学校の目標とかが、学校文化になっていくとその学校に定着するのではないかと。そういったことでユネスコスクールになるということでも定着していくのではないかと思います。

総合を中心に ESD をやっていくということになると、今までの生活が小学校 1 ～ 2 年、総合が小学校 3 年、中学校、高校までと、長い。これがしっかり出来ている学校は、そこに少し工夫を入れることによって、ESD 的なことができるので、スムーズに入ることができる。

元々の生活科や総合が、曖昧な部分であると、なかなか ESD を加えるということは難しいのではないかという話にもなりました。

学力の高い学校は、実は総合をしっかりやっているということ。

ESD をやると、学力も上がるということで、そういった効果もあるということでした。

最近若い先生が増え、年齢層が上の教員もいて、真ん中がいない。ここを繋いでくれる、ESD の繋ぐになりますが、ここを繋ぐ真ん中の人がいなくて辛い。経験があると ESD でどう工夫して、どう授業していくか、やることができますが、若い先生はなかなかそこがうまくいかないので、それを学年で、ベテランの先生と若い先生が組みながら、どのようにやっていくか、そこを繋ぐのも ESD ではないかという話になりました。

私たちが学校で、学校文化としてどう落とし込めるかというところには、先程の教育行政的な指導教育方針に ESD という 1 ページが入っています。たった 1 ページですが、富山市の 63 校ある小学校の先生が全部見ますし、中学校でも見られることになるので、行政をも動かしていくためには、私たち自身が楽しく魅力ある授業をみんなで何かやろうよ、という感じでやっています。ということが広まっていくことが大事だと感じています。

まとめ

※ESD とは生きる力であり、それをまとめていくことが教育の本質である。

※学校全体、学校ぐるみで ESD に取り組むことが大事であり、ESD に取り組むという意識や、学校の目標が学校文化になっていくとその学校に定着する。

※生活・総合をしっかりできている学校は、少し工夫をするだけで ESD 的なことがスムーズにできる。総合をしっかりできている学校は学力も高い。

※映像教材を有効活用し、知識を体験を通して実感する必要がある。知識と体験をどう結び付けるかの為に、先生がいる。

※年代による先生の 2 極化があり、ベテランと若手が組んで、どのように授業を行うか、
両者を繋ぐことも ESD である。

※自身が楽しく、魅力ある授業を行い、皆で何かやろうよ。という雰囲気を取り組んでいますという事が広まっていく事が大事。

グループワークでの意見

- ・ ESD は生きる力、教育の本質。
- ・ 生活、総合がしっかりできている学校は進んでいる、ESD に入りやすい。
生活総合がしっかりしている学校は、そもそも生活科は理科的なものや社会的なものが、気づきで生まれたもの。
それを大事にして教科書だけでなく、地域の野菜や、町探検を取り入れ、授業をしっかりとやっているところは総合的なものの見方になっている。
- ・ 総合を一生懸命やる学校は学力が高い。
- ・ ESD をやっているところは、学力が高いというのを示してくれたら、ESD をやるという学校多い。
- ・ 生活科は教科であり、総合は総合的な学習の時間といわれている。
- ・ 総合学習のテーマは学校が決めればいい。
- ・ 教科を生かしていけるような、教科横断的なプログラムをつくる。
- ・ 学校で一つの大きなテーマでやる。
- ・ ESD は特別なことでなく、特別なことをしないといけないと思ってしまう。
- ・ 外部の大学の先生等が、それは ESD になるよと言ってくれると違う。
- ・ そういう人とのつながりをつくるのが大事だし、そのためには管理職が繋がっていかないと、来てもらえない。
- ・ 結局は人とのつながり。
- ・ 先生は金の為でない何か、情熱があるはず。
- ・ ESD でこちらが仕掛けたことで、子供が喜ぶことが心の糧になる。

・NHK のデジタル教材のようなデジタル教材を使う。長ければいいというものではない。

誰が、期間は、どう作るのか。

・ある先生は結論から見せ、プロセスを考えさせる。問題意識を持たせる。

・ESD は体験だという人もいる、映像だけに頼らずに。

・知識として得たことを体験によって実感しないと、ダメ。

・家庭と学校を繋ぐ、地域。

・体験と資料映像とをどう結び付けるか。そのために先生がいる。

・教員の年代の 2 極化。これをつなぐ人がいなさすぎて。

・先生自身も持続していかないといけない。

【小学校 2 班】

＜古沢小学校、薦原小学校、西広瀬小学校、あいち国際理解教育ステーション、一般財団法人アスバン教育基金、EPO（新海）＞

発表内容

どう繋げていくかという話をしました。

私の学校の例ですが、1、2年生には生活科という教科があります。

3年生から総合的な学習の時間という、教科でない時間があり、環境教育や、福祉教育を全部含めて総合科的、教科横断的な感じで、6年間で環境をどう学ぶかとか、福祉をどう学ぶか、国際交流をどう学ぶかというような観点で計画しています。

生活科と総合的な学習を繋げて考えようと、職員会で提案しOKが出た。子供たちに名前を募集したら、学校の中に大きな楠があって、「くすのき学習」という名前をつけて生活科と総合を呼ぶことにしました。

ESD 的な視点とか命に関わることとか、未来を考えることも全部くすのき学習と呼ぼうということで、ESD 的な観点で道徳や社会科を全て「くすのき学習」と呼ぶようにしました。

子供たちには名前が定着し、先生方もそれに乗かって、今日にくすのき学習でこういうふうにするね、ということが学校の中で定着しました。

自分の週案のところには、くすのき学習とし、今日は社会だったり、道徳だったり、教科数のカウントはそちらで行い、そういうことを行うことによって、広がりが出てくると考えました。

くすのき学習にも繋がりますが、横断的ということで、どこの学校でも行なっているかもしれないですが、うちの学校は今年からユネスコスクールに認定され、去年の3月からESDカレンダーというものを作り、教科ではどういうふうに繋がっているかを一生懸命見直しています。

そういうものを考えながら授業をどう組むのかは、一番難しいとの話でありました。

私はこの学校が7年目なので、一体どこにどのような人がおられて、どのような組織があって、どんな場が設定出来るかとか、子供たちとどのような活動が出来るかっていうようなことが割とわかりますが、1年目に同じように授業があたり、テーマは古沢らしさでと言われ、田んぼしかなく、一体何をしたら良いのかと感じました。どういうことを活かしていけばいいのかESDカレンダーと一緒に書かれているなど、整理していかないとダメではとの話となりました。

また、どうしても先生方の温度差があるということ。
これをどうするか、全体でカレンダーを作りながらみんなで話し合うとか、本当にこんなことをやってみようと広めるとか、先生たちと情報を共有していくことが大事であり、これらを埋めるためにも、地域に学校と地域をマッチングしてくれるコーディネーターがいてくれたら良いと思います。

そのためにはお金がかかるという話も出ました。
同じ学校に何年間か、年間通して来て下さるような人がいて、小中学校と係わってくれたら、小中学校連携にもなるので幅が広がるのではとの話がありました。

ある企業がノートを児童に配り、例えば水であれば水を調べ、チェックし、家でも調べたものを、企業が分析してくれるものがある。
そういうシステムが出来つつあり、企業がお金を出してもメリットのある事業もある。
それを受け、来年、次の5年生でやってみようかと考えています。

まとめ

※ESD と構えず、総合学習として授業をどう組むか。
(教科横断的に、社会であったり道徳であったり。)

※総合学習に名前を付けて、なじみや親しみを持つようにする。(くすのき学習)

※学校全体で教科を横断したカレンダーを作り、そこにテーマが整理されていると授業がしやすい。

※調整役となるコーディネーターが必要で、学校をまわって頂くことにより、小中学校の連携にも繋がる。調整役がいることによる成果を示さないと、予算も出ず、持続しないため、PTAの中から選ぶ等、新規人材の発掘も必要。

グループワークでの意見

- ・地域の人たちと田植えやったり、そういうのにも支援したり、全部調整役が間にいるから、先生方も今年はこんなことやりたいですよと、話をすると了解が得られ、調整をしてもらえる。
- ・調整役が必要
調整役がいることにより、何が変わったかというのを出していかないと、予算が続くことはない。
調整役は学校では多分難しいので、NPO 等がコーディネーターとして入ると、学校の授業がこう変わるなどを見せ、先生にはすごく喜ばれている事を見せないと続かない。
- ・コーディネーターの起用性を示す。
- ・また、教育委員会が主体になるなど、どこかが、サポートしてやっていかないと、ずっとやり続けられない。教育委員会とかは、最初から元々ゼロシーリングされていて、何かの授業辞めるのであれば、予算をつけるみたいな、感じになっており戦意喪失している。
- ・PTA等、新規人材発掘。
- ・学校と企業を繋ぐ。
- ・企業の協力により、例えば水を調査することを提供することや、お金出しても企業にとってもメリットがあるものには協力出来るとのこと。
- ・先生方が授業をどう持って行くか。
- ・ESD とか構えないで、普通に総合の授業としてやった。
- ・生徒数、規模が小ぶりなところが多いので、それで出来るか。
- ・コーディネーターが入るということ。例えばその地域担当の相談役みたいな人が長い期間で必要

- ・予算が必要。
- ・先生方の温度差を埋めるために何をすれば良いか。
- ・学校全体に広まるように、学校全体で ESD カレンダーを作る。
こうなりますよと言って広める、やって見せる。（教科を絡める。生活科と総合学習）
- ・授業時間の名前（くすのき）

【中学校】

＜泉中学校、長森南中学校、新香山中学校、亀の子隊、NPO 法人 NIED、EPO（高橋）＞

発表内容

中学校を語れば語るほど、ネガティブです。まずはここにあるけど忙しい。生徒指導もあるし、話せば話すほど持続不可能な現場になっていることになってきたのですが、ESD に取り組む意味、意義をどうやって伝えるのかということでした。

ESD の概念よりもツールとして、使った方がいいのではないかと、しかし現場にはあまり参加しない子供や、授業が苦手とか、小学校の時よりもその辺の差が非常に大きい。何とか参加型の授業が出来ないかと。ツールとして出来ないかという話になりました。

今中学校は、個々の教員の裁量、授業力とか、カリキュラム、それぞれの教育課程に縛られているところがあり、そういうところではないフィールドで勝負するには ESD、つまり環境学習や総合学習のフィールドはとてもいいのではないかと。

トレーニングや、授業の問いが大事という問題解決学習ということが話し合われました。そういう授業改善をしていくということは ESD の授業が一番相応しいのではないかと。結局子供は、教材よりも思考がどう変わっていくかという見通しが大事だと思います。

一生懸命にリサイクルします、結局はゴミを出さないことが大事だよという子供を育てなくてはいけません。レジ袋とかエコバッグとかいっても、結局は買い物の時に気をつけようという子供でないといけない。

そういう思考力を育てるということがこのモデルプログラムの価値なので、今後これはどちらかというと活動重視型で、活動が羅列して紹介されていますが、出来たら子供の物の考え方がこうある、こう変わるべきだよということが、実践の中で一般化されて変わっていくことにより中学校の現場の人にもこれを手にして、そして環境省・文部科学省どちらの省の人たちもこれを手にして、気持ちよくやっていけるのではないかと。コラボレーションしていけるのではないかとということでした。

まとめ

①ESD に取り組む意義をどうやって伝えるか。

- ESD とは何かという定義より、方法論として捉える。それにより価値観を育てることができ、行動が変わることに繋がる。

- 体験を通した実感が得られ、子供の喜びを作り出すことができる。

- 気づき、判断力を付ける、それが認識する力に持っていく、行動につなげる。

- 子供の思考力の変化が学校改善に繋がる。

②生徒をどのように参加型に巻き込むか。

- 参加型が成立する風土をつくる。（トレーニング）

- 子供の主体性を引き出すための工夫が必要。

- 「教える」のではなく「問う」

- 楽しく学ぶための参加型を考える。

③教員の裁量やカリキュラムに縛られている。

- 地域に限定したテーマ、横断的、総合的な教育をどう取り入れるか。

※中学校は生徒指導等で多忙である。プログラムをツールとして利用し、価値あるものを一般化して活用する。そのために、まず授業改善が必要で、それにより子供の変容として「思考力」の変化に繋がり、行動の変化に繋がっていく。

グループワークでの意見

- ・何したいのか、どうしたいのかが明確だということ。そのためには入口は何でもいい。そうやって取り組んでいくことこそ意味がある。
- ・特殊なことではない。どこでも出来る。どこでもキャリア体験やっている時に、この視点でやったらとってもいいし、良いキャリア体験できるよというモデルがあったらすごくみなさん助かるかな。
- ・地域、そこしか出来ないものでなくて、材料はなんでも良い。その手法というか、そういうものが中学校は見本が少ない。小学校であればたくさん見ているが。
- ・子供の主体性とか、興味をひくような方法論であったり、工夫やカリキュラムとかプログラムが必要。
- ・普通の材料。
- ・普通の材料で中学生向きのものがあれば取り組みやすくなる。
- ・みなさん方の今回の一つ一つの取り組みがモデルだと思う。同じようなことをやっているけども、例えばそこにこういう視点を入れてみたら、もっと何か結果が変わるよとか、そういう一つずつの工夫が少しずつ子供に火をつけていく。主体性を引き出していく。
- ・実感がないと子供は変わらない。おもしろいと思わなかったら続かない。
- ・面倒臭い、こんなのやらないという無関心の悪循環は情報がないから無関心で、関心がないから参加しない。参加しないからまた情報がないという悪循環。
- ・何であれば食いつくかという関心をニーズに合ったような資料の出し方をしたり、情報の出し方を工夫したり、少し関心を持ったらこんなものに参加し

てみようという体験型に繋げていくとか。体験してみたら様々な人に出会い、分かる。

- 皆で感情と考えとを共有する場を作っていき、関心と課題を共有すると、協力が生まれる。関心と課題を共有すると協力が生まれるという事をうまく使っているのが参加型の学びの場です。
- 関心のあることでこんなことをやってみようと考えてみてとか、グループで作ってみてというとな協力が生まれるので、そうしたら関係性が変わってくる。そういう方法論を身につけられて、入手されて、少しずつやってみた実感を他の人に伝えていく。他の人ともやってみたりすると、広がっていくのではないかな。
- 環境教育をやるのがE S Dでなく、何からでもできるよ。という。量的に変えるというより、ちょっとしたこと、今まで教えてきたことを教えないうで、質問してみるとか、仕掛けを作ってみるとか、本当にそういうことでいろいろが繋がっていくのではないかな。
- 職場体験学習行って帰ってきたら、まとめを作ってしまう。その事業所は、何かエコの取り組みをやってきたかとか。
- 見つかる、見つからないと思います。小さな事業所ではあまりやってないという認識になるのであれば、大企業の人たちを呼んで、そうか大企業しかないのかなと思ったら、小さな運動具屋の方を呼んできて、そんなことないよ、ともう1回見直してみると、結構あると。
自分たちもやらなくてはいけない時代だね、となり、CSRの勉強にもなると思うし、視点というか子供の問いの与え方というかな。
- やってみるとトレーニングも大事です。そういう視点も与えていくと子供が。一度中学生が動き始めたら、すごいことやりますから。とてつもないことやるので、一度火がつけば。
- 学校の文化になってくるとか。
- 火を付けるのが大変ですが。

- ・子供は ESD を知らない。何それって感じですね。それは大人の論理であって、子供は楽しくやっていたらいい。
- ・共通するのは人作り、どういう子供を育てていくのかという、そういうこと。
- ・生徒指導が多忙化。
- ・総合学習が入った時のように、こういうものが入ってくると皆嫌がる。
- ・思考力、方法論、授業改善
- ・まず現場は忙しいと訴えなきゃいけない。生徒指導とか。
- ・このプログラムの中から価値あるものを引き出して一般化していきたい。
これをひとつのツールとして使っていけばいい。そしてそれは学校などで、授業改善の中で使っていくといい。
- ・子供の変容、つまり思考力がどれだけ伸びたかということを、物の考え方がどう変わったかをプログラムで示していったらいい。
- ・多忙ということは出ていない。いろんなことやらされて困る、でもこのプログラムをツールとして使って、その中から価値あるものを一般化して活用出来たらいいのでは。
- ・それをやろうという場は学校の中で授業改善が一番だと、まず授業改善からやっていかないといけないだろう。
- ・授業改善の場は環境学習や総合学習の場が一番手っ取り早く、合っているということ。
そこから他の教科領域に入っていっていったらどうということ。

- ESD に取り組む意義があることは分かっているが、どう伝えたらいいかという際に ESD とは何かという定義を考えるより、方法論と捉えた方が気楽。方法論は価値観を育てることにより、行動が変わっていくことを示せるようなもの。

体験を通した実感があると、子供に喜びを与えられるという方法論として伝えたら、分かりやすいのでないか。
- 気づきから行動への間には間があって、行動を変わってもらおうとか、子供の変化を伝えたいと思うのであれば気づく、その次に判断する力をつける、それを認識する力に持って行って、それが行動に繋がるようなところを上手く工夫したりとか仕掛けたりして繋いであげるということを見せてあげればいいのか。
- 問題のある学校にとっては、子供の思考力の変化が学校改善に繋がるよというのが大きい。思考力の変化が、こういう行動の変化に繋がったよっていうことを何かしらいう。

教科教育というよりは、そういう何か方法論、子供たちに火を付けて、子供たちの行動が変わることで学校の雰囲気も変わっていく。というような方法論として取り組み、それを伝えていったらいいのではないか。
- 関心のない生徒を参加型に巻き込むというところで、最初から無理だろうと、それはやはりスキルを身につけたり、アイスブレイク的な投げかけたり、とかがあって初めて参加型で成立する。

参加型が成り立つような風土なりトレーニングは必要かも。

それぞれの先生はいろんな思いや願いとか熱い思いを持ってらっしゃるので、子供の主体性を引き出したり、発揮するための工夫をするというのは重要で、教えるのではなくて問う、考えてもらうという、どうしてなのかとか、何がわかったのか、というような、問うということをメインにおいてやればいいのか。

楽しくないといけないので、楽しいと思えるような何か投げかけとか、方法とかを考えてみたらどうだろうか、教科の中で流れがあって、環境・キャリアとぶつ切りになるというところに悩まずに、全部繋がっているから、どんどん繋げて広げて、何でもが ESD であり、どこからでも ESD ぐらいに思っておいたほうが気楽。

【意見交換会を終えて参加者の感想】

- ・中部地方で実践授業が実際にどのような授業だったのかが分かり良かった。
- ・どの授業も地域や学校の特徴や良さが生かされていて、次に自分もやってみたいと思った。
- ・他県の先生方ともお話をすることがあり、良かった。
- ・他の方の意見を聞くことができ、自分の今までのモヤモヤが解決した気がする。
- ・ESD の授業を通して、「子供の思考がどう変わったのか」を柱にして授業づくりをしていきたいと思った。
- ・中学校の先生やゲストの方のお話が大変参考になった。
- ・他県の方、NPOの方と話ができて良かった。
- ・やろうという先生が集った会議は前向きである。意識を持たない先生に ESD の価値をいかに持たせるか。
- ・地域密着授業の豊かさを知ることができて良かった一方で、自然が乏しい地域では、どのようなものがふさわしいのか、この違いは将来結構大きなことにつながる気がする。
- ・現場の生の声を聞くことができ、参考になった。
- ・気になっていた他県の実践について、話を聞く事ができ、有意義な会だった。
- ・ESD への熱い思いを多くの方から聞き、刺激を受けました。多忙な毎日ですが、また ESD を頑張ろうと思う。
- ・多様な立場の方々から様々な意見を聞く事ができて有意義だった。もう少しテーマを決めてディスカッションする時間があると良かった。

- ・現場の状況が分かり、良かった。
- ・現場への浸透の方法を考えていかなければならない。
- ・「授業改善」という視点で ESD の取組を見直す。子供の変容を思考力から捉えていくという視点に大賛成。
- ・最後のグループワークの時間が良かった。もう少し時間を取れば、もっと良かった。
- ・先生はパワフルで、先生には思いがある。しかし先生は忙しい。何がどのような成果を生むのか、何に繋がるのか分かりやすいツールを作ろうと思った。
- ・現在、総合学習の主任をしているため、年間計画や、備えたい能力を提案する中で、そこに ESD の内容を入れた。これにより校内に広めることができたと思う。
しかし、さらに外へ広めるためには、校長～教育委員会～他校の力が必要だと感じる。
中部地方環境事務所の力で市の教育委員会へプッシュするような支援をして下さるのもいいかなと思う。
- ・思考力こそ ESD の中核である。

4 まとめ

(1) 学校、地域が環境 ESD プログラムに取り組む理由

ア 地域独自の教育方針を、その地域に確立し、地域の教育は地域でつくるために ESD が必要である。

イ 子供の価値観を育て、判断力、認識力を養い、行動を変え、生きる力をつけるための手段として ESD に取り組む必要がある。

ウ 様々な参加型プログラムを通じて体験をすることによって、子供の喜びを生み出し、子供たちの意識を変えていくことに繋がる。地域での将来の担い手を育成することが重要である。

(2) 学校、地域で環境 ESD プログラムが取り組まれていない理由

ア ESD に取り組むための環境が整備されていないことが最大の理由である。

イ 教員の意識の問題があり ESD を難しく捉えていて、そもそも ESD とは何かという事が簡潔に説明されておらず、抽象的に表現されているため、取り組みやすいような状況になっていない。

ウ 教員が授業以外の業務が多忙であるということも理由の 1 つとして挙げられる。学校現場では、毎日を維持することが精一杯になってしまっている現状があり、新しく何かに取り組む姿勢や意識が足りていない。

エ 漠然と ESD の取り組む意義やもたらす効果を理解していても、それが示されていないため、なかなか行動に移すことができていない現状がある。

(3) 学校、地域が環境 ESD プログラムに取り組むために必要な事項

ア ESD とは何かという簡潔に説明できるようなものを示す必要がある。

イ ESD に取り組む本当の意義や効果について理解を得る必要がある。

ウ ESD を特別なことと捉えず、教科横断的な総合学習を発展させるという考え方を教員が持つことが重要であり、教員の共通の喜びは子供の変化を実感することである。そのためには、子供を引き付けるための授業をすることが必要であり、授業改善が課題となる。

エ 授業改善をするために、教員は即効性のある手順書のようなテキストを必要とするであろうし、授業改善によって子供がどう変化するか、どのような変化を生み出すかという具体的な効果もテキストの内容に含める必要がある。そして、テキストそのものを手に取らない人のために、使い方講座を開催することも必要になるのではないか。

オ 1つのテーマで教科を横断できるようなテーマ学習を取り入れると効果的である。

例えば、「パン」というテーマでも、パンを作ってみよう、作ったパンを売ってみよう、パンの歌を作ってみよう、というような横断的なプログラムが必要である。

カ 総合学習自体に名前を付け、学校全体で親しみのあるものにして、学校文化として浸透することも重要である。

(4) 環境 ESD プログラムが地域で広く取り組まれるための中間支援組織の役割

ア 中間支援組織には、学校や地域で ESD に取り組むための新たな仕掛けの発信や、仕組みづくりのような、ESD に取り組みやすい状況をつくる働きかけをする役割が求められる。

イ 現場である学校が ESD に取り組みやすくするためには、学校間の情報提供や収集、共有をする調整役としてのコーディネーターの起用性を示すことが重要である。

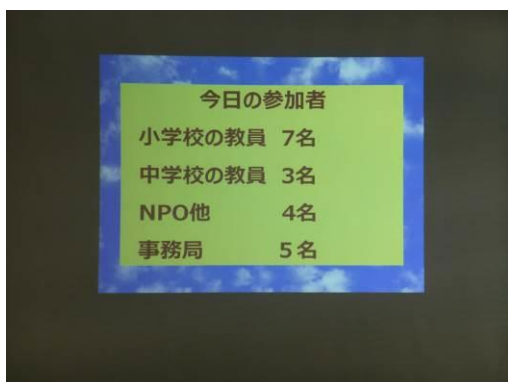
ウ コーディネーターための人材の発掘方法や、各地域への配置をどのように配置するか等の課題が挙げられる。そのための予算を確保し、その予算をどのように持続させるための支援として、中間支援組織の役割がある。

エ 地域の教育をつくるための予算は、地域が出し合い、継続的なものでなければならぬため、教育委員会と共に地域に対して、どのような説得材料を用いるのかということも重要である。

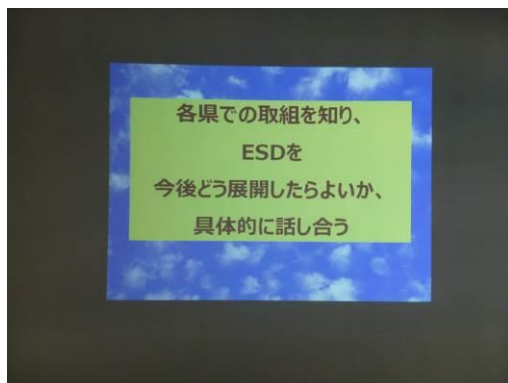
オ 地域の希望の配当は、子供達がどのように変わったのかという実感であるため、一連の変化をエピソードとして示すことと、変化した成果を数値化したものの両方を上手く活用して示し続けていくことが非常に重要である。

カ 市町村の教育部局の意思決定者が情報を共有し合うことにより、共通の基盤をつくり、地域の教育は地域がつくっていく仕組みづくりの促進。

(取組発表の様子)



(意見交換会の様子)



リサイクル適性の表示：印刷用の紙にリサイクルできます

この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準にしたがい、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料[A ランク]のみ用いて作製しています。